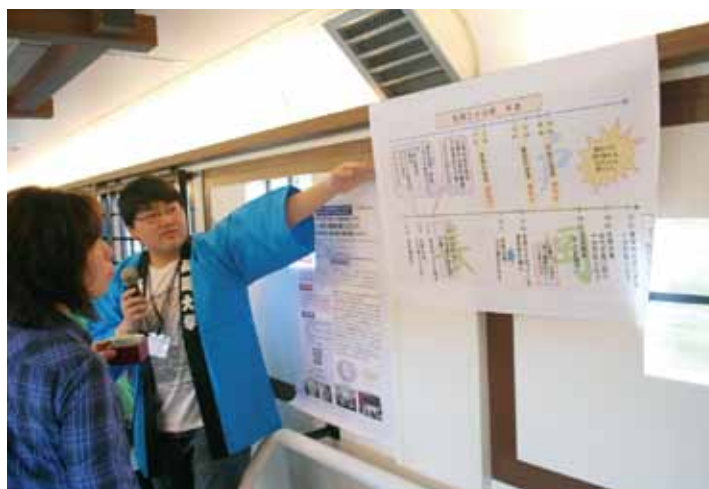


十分杯で長岡を 盛り上げよう!

平成27年度
学生による地域活性化プログラム

権五景ゼミナール活動報告書



09

平成27年度

ごあいさつ



経済経営学部長 村山 光博

長岡大学の「学生による地域活性化プログラム」は、平成 19 年度に文部科学省の現代的教育ニーズ取組支援プログラムに採択された「学生による地域活性化提案プログラム 一政策対応型専門人材の育成」に始まり、今年度で丸 9 年となります。次年度はいよいよ 10 年目ということになるわけですが、この教育プログラムの成果が実際に地域活性化に貢献できているのかについて、これまでを振り返りながら今後の取り組みへの方向性を確認する時期に来ているとも言えます。

直接的に目に見える貢献とまでは行きませんが、始めたばかりの 9 年前と比較すると周辺地域における「学生による地域活性化プログラム」の認知度は明らかに高まっていると感じます。これまで本プログラムの運営において積極的にご支援をいただいていた地域連携アドバイザーの皆様だけでなく、初めてお会いする地域の方々からも本プログラムの個々の取り組みテーマに対するお問い合わせや称賛の声などをいただくことが増えてきております。また、テーマによっては学生の取り組みに関して新聞やテレビなどのメディアでも大きく取り上げていただくことが多くなりました。

長岡大学の建学の精神は、

- ・幅広い職業人としての人づくりと実学実践教育の推進
- ・地域社会に貢献し得る人材の育成

です。「学生による地域活性化プログラム」は、まさにこの精神を実現するための本学の重要な教育プログラムであると言えます。

「地域活性化とは何か」という問いに対する明確な答えは無いと思いますが、そのような答えの無い課題に対して、どのように考え、どのように行動して行くのかを学生が自ら試行錯誤しながら体得していくことができます。これは大学を卒業して地域社会の一員となる学生たちが、将来、それぞれの地域が抱える課題を乗り越えていかなければならないことを考えると、彼らにとって貴重な体験となるに違いありません。

本プログラムでは、ゼミナールという単位で 1 つのテーマを取り上げ、ゼミに所属する複数名の学生がグループで活動を進めて行くこととなりますが、時には学生同士での意見の食い違いや、ちょっとしたすれ違いなどが起こることもあります。このような体験も学生がさらに一段成長する要素となります。ゼミで決めた研究テーマをまとめ上げるために、どのように他の学生とかわかりながら取り組みを進めて行くべきなのか、この取り組みの中で自分の果たすべき役割は何であるのか、などを考えながら活動を行っていくことで、チームで活動することの難しさだけでなく、チームでやり遂げたことの充実感や達成感を味わうことができます。

「学生による地域活性化プログラム」では、学生が地域の皆様と一緒に考え、汗をかき、そして楽しむことで、当面の地域貢献だけでなく将来にわたって地域の活性化を担っていける人材の育成を目指しております。

地域の皆様には日頃より、本プログラムへの多大なるご支援とご協力をいただき、心より感謝申し上げます。

平成 28 年 3 月

はじめに

十分杯で長岡を盛り上げよう！ —地域資源としての十分杯—



長岡大学准教授／ゼミ担当教員 権 五景（樂九）

権ゼミでは、2011年度から十分杯の広報活動を行ってきました。そのきっかけですが、権ゼミはもとも企業見学を通して現実経済や経営に対する理解を深めることを目標としておりました。たまたま、長岡の工業の成り立ちを学ぶため、長岡歯車資料館を見学しその帰りに十分杯に遭遇しました。学生たちも小生も皆そのからくりとメッセージに惹かれました。その後、今はゼミのアドバイザーになってくださっている太刀川喜三様の十分杯展示会に偶然足を運ぶことになりました。その後、十分杯の講演会があることがわかりました。その時の講師が、現在、太刀川様とともに本ゼミのアドバイザーになってくださり、何と以前の見学先だった長岡歯車資料館の館長の内山弘様でした。きっとご縁があったと思います。その講演会に参加して以来、学生たちも小生もぜひ十分杯にかかわる活動を始めようと心に決めました。

1年目は、地元の若者が地元の歴史を学び、それを知らせていこうとする活動ということで、テレビや新聞の取材を受けました。初めての体験で、学生たちも小生もわくわくした記憶がございます。そして、活動の目標は十分杯の認知度を高めることに設定しました。また、活動開始にあたって、からくりの仕組みをわかりやすく伝えるためにオリジナルの紙コップ十分杯を製作して広報活動で配布しました。月1回ほどアオーレ長岡で暑い日も寒い日も活動を行いました。

2年目は、認知度の低さがそもそも問題でしたが、どれだけ低いかを確認しようではないかということで、長岡駅周辺でアンケート調査を行いました。また、秋にアオーレで開催された酒の陣という大きなイベントに十分杯専用の立派なブースを長岡市が用意してくださり、私たちも力が入りました。

3年目は、主に、十分杯が長岡に初めて入った当時の経済・社会状況はどのようなものだったかについて、文献研究を行いました。また、50点ほどで数は少ないですが、それでもおそらく世界一多い十分杯のコレクションを学食の脇のショーケースに展示しました。

4年目は、着実にやってきたお蔭で、それなりの収穫がございました。第1に、昨年引き続き綿密な文献研究を行いました。多くのことがわかりました。それを年表という形にすることができました。第2に、地域の関係者と意見交換をはかる目的で「十分杯会議」を初めて開催しました。非常に意義深い会議でした。第3に、同会議で提案した、観光列車「越乃シユクラ」と十分杯のコラボレーションのアイデアが実現できました。また、「満つれば欠く」という教訓についても深く勉強することができました。そして、私ごとで恐縮ですが、その教訓から学んだ証として、十ではなく、「九」を楽しみながら生きていくということで新たに「樂九」という雅号を作りました。

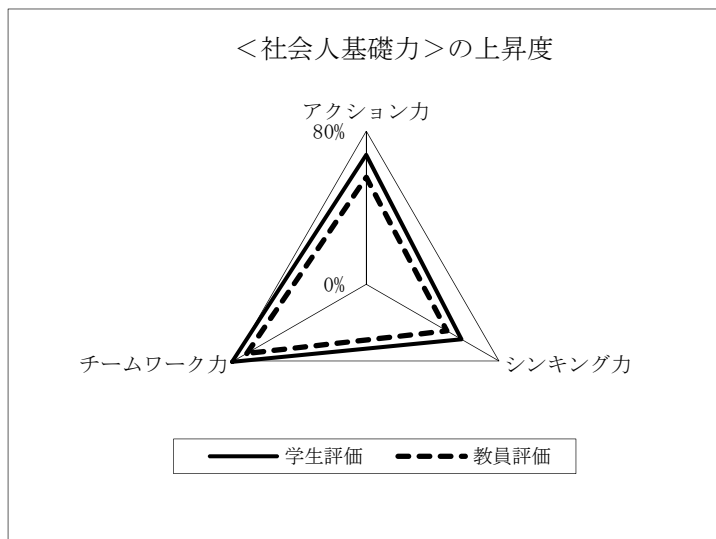
5年目の今年度は大きく前進した1年でした。4年間続けてきた街頭広報活動は行いませんでしたが、11回行ったJR観光列車「越乃シユクラ」での広報活動の効果は実に大きかったです。また、十分杯に関する理解を深めてもらうための小冊子を作成しましたが、これも非常に好評を得ることができました。2回目の十分杯会議も非常に有意義でした。そこでは、関係機関に13の提案（一例として、ふるさと納税の返礼品として十分杯の活用）を行いました。

最後に、アドバイザーの二方、権ゼミの卒業生の皆さん、十分杯会議に来てくださった皆様、長岡コンベンション協会の皆様、酒の陣で立派なブースを用意くださる長岡市の皆様、そして、私どもの活動をバックアップくださる本学の事務方の皆様にこの紙面を借りて深く感謝申し上げます。

平成28年3月

平成 27 年度 学生による地域活性化プログラム 社会人基礎力の上昇度

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、社会人基礎力の向上、ビジネス展開能力の向上、専門的スキルの向上が目的である。平成 27 年度学生による地域活性化プログラムに参加した 9 取組の学生の「社会人基礎力」の伸び具合について、学生とゼミ担当教員にアンケートを実施した。アンケートは取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。学生は自己評価（有効回収 68）であり、教員は各ゼミ生についての評価である。

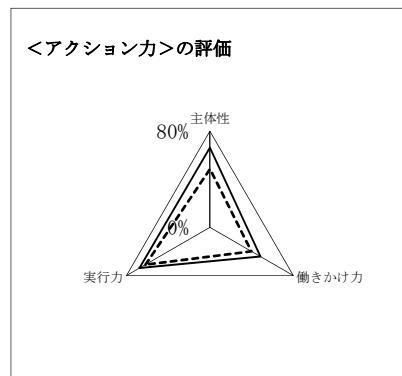


★「社会人基礎力」

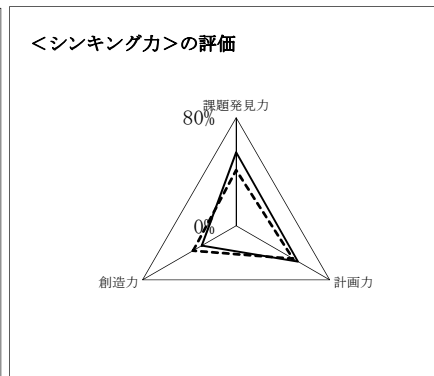
＝「アクション力」「シンキング力」「チームワーク力」が上昇

3つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価と教員評価の間にずれがある。今後の取組においては、今年度の結果に現れている学生評価と教員評価の差を小さくすると同時に全体的な上昇度を高めていくことに対して、継続的に検討していく必要がある。

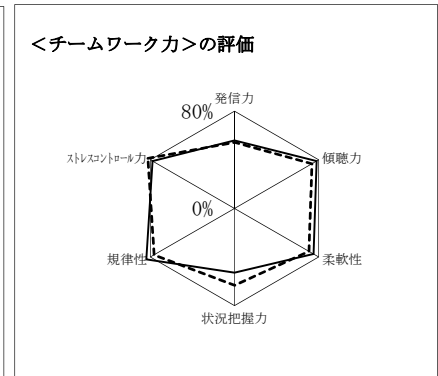
	学生評価	教員評価
アクション力	67.6%	55.9%
シンキング力	57.4%	48.5%
チームワーク力	80.9%	72.1%



	学生評価	教員評価
主体性	66.2%	48.5%
働きかけ力	48.5%	39.7%
実行力	67.6%	61.8%



	学生評価	教員評価
課題発見力	54.4%	41.2%
計画力	52.9%	48.5%
創造力	29.4%	36.8%



	学生評価	教員評価
発信力	55.9%	54.4%
傾聴力	77.9%	73.5%
柔軟性	75.0%	70.6%
状況把握力	52.9%	63.2%
規律性	83.8%	76.5%
ストレスコントロール力	77.9%	82.4%

＜アクション力＞

アクション力の3つの指標を比較すると、主体的には取り組めたと思っている学生の割合は高いが、教員の評価は低くなっている。

学生はそれなりに積極的に活動を行っていると感じている一方で、教員としては、まだまだ自主性が足りないと感じているようである。

＜シンキング力＞

学生の自己評価では、課題は見つけられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は少なく、また創造力が極端に低くなっている。また、教員評価でも創造力については厳しいものになっている。昨年同様、シンキング力が弱い傾向があり、この点をどのようにして伸ばしていくかが課題として残った形である。

＜チームワーク力＞

チームワーク力は、「アクション力」や「シンキング力」よりも学生評価と教員評価の類似性が高い。

学生の自己評価も同様であるが、教員の評価が発信力と状況把握力が低い点は、今後指導を強めていく必要がある。



平成27年度 学生による地域活性化プログラム
十分杯で長岡を盛り上げよう
—地域資源としての十分杯—

■担当教員
権五景

■ゼミ学生
3年生：中澤司
2年生：大滝皓史、片桐湧太、田村啓輔、山田祥平
■アドバイザー：太刀川喜三氏（郷土史家）
内山弘氏（長岡歯車資料館 館長）



取り組みの概要

長岡の文化遺産である「十分杯」を活用し、まちおこしをしようと活動しています。しかし、まだまだ市民の認知度が低いという難題があります。そこで、広報活動、観光コースの開発、観光商品の開発などを行っていき、十分杯の認知度をより高めるべく活動しています。

ほかの杯と大きく異なる4つの点

- ① 杯なのに底に穴がある。
- ② 杯の中に「かざり」という突起がある。
- ③ 飾りの中は管が通っている。
- ④ この杯に一定の量(8分目程度)を超えて注ぐと中に入っていたすべてのお酒が底の穴から漏れてしまう。



飾りの中に管が通っている

底に穴が開いている



長岡と十分杯の関わり

長岡藩と十分杯の出会いは三代藩主牧野忠辰公(まきのただとき 1665-1722)の時代にまで遡ります。

忠辰公以前からも武士は簡素な生活を旨としていました。ところが、元禄時代(1688-1704年)になると貨幣経済が発展し、戦国期の苦しい時代から民衆も生活水準が向上し、生活必需品以外を購入する余裕もでき、町人の生活が奢侈化するにつれて武士たちも同調し華やかな生活をするようになりました。長岡藩も例外ではなかったのですが、高田城二の丸請収のための出費、度重なる水害で藩の財政が悪くなっていました。そこに、塚越という領民(おそらく庄屋)の持参した十分杯に忠辰公が感銘を受けて詩を詠み、処世訓としたことから長岡に十分杯が知られることになりました。忠辰公は、十分杯が持つ「満つれば欠く」という処世訓を藩士に示すことで、財政を引き締めると同時に、武士としての戒めを大事にしたと思われます。

酒の陣と
観光列車
越乃 Shu * Kura
での活動風景



十分杯で長岡を盛り上げよう！

—地域資源としての十分杯—

権五景（樂九）ゼミナール

13M022 中澤 司

14K017 大滝 皓史 14K019 片桐 湧太

14K054 田村 啓輔 14K081 山田 祥平

目 次

1. 序章	1
1.1 なぜ十分杯に着目するか	1
1.2 活動の意義	2
1.3 十分杯の位置づけ	3
1.4 活動のモデル	3
1.5 具体的な活動方針	4
2. 今年度の活動紹介と成果	6
2.1 昨年度までの活動	6
2.2 今年度の活動	7
2.2.1 越乃 Shu*Kura とのコラボレーション	
2.2.2 十分杯リーフレットの作成	
2.2.3 悠久山・栖吉「歴史観光コース」の検討	
2.2.4 各種イベントへの参加	
2.2.5 まちゼミでの広報活動	
2.2.6 FM ながおか 番組出演	
2.2.7 十分杯ブログの更新・十分杯ツイッターの開始	
2.2.8 「第2回 十分杯会議」の開催	
2.2.9 悠久祭での十分杯展示	
2.2.10 「大学人サミット」への参加	
2.3 活動の成果	15
3. 十分杯の生産の現状—供給過不足の問題—	16
3.1 問題点	16
3.2 原因はどこにあるのか	16
3.2.1 岡崎氏へのヒアリング	
3.2.2 柴木氏へのヒアリング	
3.2.3 見えてきたもの	
3.3 解決策の提案	18
3.3.1 大量生産の提案	
3.3.2 地元生産拡大への提案	
4. 十分杯が長岡に伝えられた前後の江戸経済の状況	21
4.1 長岡藩の江戸からの影響の正否	21
4.2 十分杯が登場した頃の江戸の経済政策（1682-1689 年の江戸経済）	21
4.2.1 十分杯登場前の江戸の経済政策（1682-1686 年の江戸経済）	
4.2.2 十分杯登場後の江戸の出来事（1687-1689 年の江戸経済）	
4.3 儉約に関する経済政策を出した理由	23
4.4 まとめ	24
5. 13の提案	25
5.1 ふるさと納税の返礼品の一つに	25
5.2 観光列車越乃 Shu*kura の土産物（限定品）に	25
5.3 十分杯陶芸教室の復活	25

5.4	十分杯という銘柄のお酒	25
5.5	十分杯で酒蔵ツアー	25
5.6	干支の十分杯	25
5.7	十分杯を盛り込んだカルタ作り	26
5.8	大きな十分杯を設置	26
5.9	十分杯通帳作り	26
5.10	日本酒乾杯条例とマッチする十分杯作り	26
5.11	長岡市指定文化財への登録	26
5.12	杯サミットの開催	27
5.13	長岡酒の陣での「川柳大会」開催	27
6.	結びに代えて	28
補論.	十分杯入門	29
補.1	4つの特徴	29
補.2	教訓	30
補.2.1	『十分盃銘』の中の「天道 <small>てんどう</small> 虧 <small>き</small> 盈 <small>えい</small> 」	30
補.2.2	様々な「足るを知る」と「満つれば欠く」と歴史	31
補.3	杯の構造と原理	34
補.4	十分杯という名称	35
補.5	長岡と十分杯の関わり	36
補.5.1	江戸時代	36
補.5.2	明治時代以降	38

参考・引用文献

参考ウェブサイト

1. 序章-本活動の視点と活動方針

本章においてはまず、「本活動の視点」すなわち、私たちの問題意識について紹介する。そして、私たちの取り組みについて、意義・方針・位置づけなどを確認し、報告全体の内容への足掛かりとしたい。

1. 1 なぜ十分杯に着目するか

まず、表1を確認されたい。この表は右側に長岡の現在の産業を示し、左側にはそれぞれの産業の発展の元になった地域資源・できごとを示している。例えば現在の長岡は、機械工業の集積地となっている。これについて、元をたどると、当地の油田における石油掘削機械の製造・修理の過程で、技術が培われてきたという背景がある。また、長岡を創業の地とする北越製紙（現：北越紀州製紙）は当初、城岡にて稲わらを用いて紙を生産していた。他にも、大雪（水資源）や稲作に由来する、日本酒・発酵食品（醸造業）などの事例がある。

<表1>長岡の産業・現在とそのルーツ

地域資源・きっかけ		産業・現在
石油	⇒	機械工業
	⇒	金融業
稲作	⇒	製紙業
	⇒	米菓製造
	⇒	日本酒
大雪（水資源）	⇒	日本酒
空襲（戦災からの復興）	⇒	花火・まつり（観光業）
十分杯	⇒	おみやげ・イベントなど 観光業

これらの事例から、私たちは1つの考えに至った。それは、「経済発展は“有から有”の連続」ということである。経済発展を指して「無から有を生み出す」と形容することがある。しかし、それは非常に稀ではなかろうか。“石油が出ない”長岡に、現在のような工業集積が存在し得ただろうか。可能性は低いと思われる。少なくとも長岡において、石油という「地域資源」の存在が、工業の発展にプラスに働いたことは疑い難い。このように、もともとその地に“有る”地域資源を、上手く活用し、より磨きをかけていくことで、新しい産業が生まれ育っていくのだと考察する。そして、それが断片的に生じるのではなく

広範囲にわたり次々に連続して発生していくことで、地域全体に活気があふれることこそ、真の「経済発展」と言えるのではないか。私たちはこの一連の流れを、「有から有の連続」と捉えている。

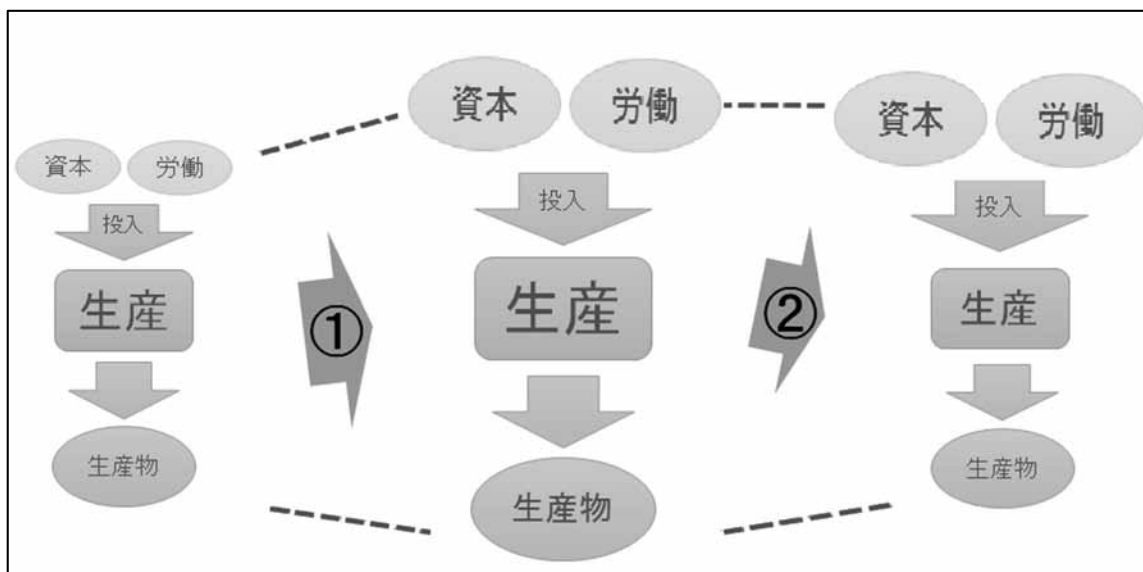
そして、私たちは歴史的に長岡とのかかわりが深い「十分杯」を地域資源のひとつと位置づけている。十分杯を活用した、おみやげ品の提案、イベントの実施、観光コースの提案などを通じて、長岡のさらなる経済発展に微力ながら寄与したいと考えるものである。

1. 2 活動の意義

続いて、活動の意義についての見解を紹介する。下図を参照されたい。経済学において一般的に、資本や労働などの生産要素の投入量を増加させると、その結果の生産物も増加する。しかし、これは無限に続くのではなく、いずれ頭打ちとなりやがては減少へと向かう。そのため、同量の生産要素を投入しても収穫は逡減していく。

このことから、矢印①のような成長期には既存産業を成長させるための投資が重要になり、矢印②のような成熟・衰退期には新産業育成・開拓のための投資が重要になるのである。

<図1> 成長期と成熟期



残念なことであるが、私たちは既存産業をさらに発展させるための資本や労働は提供できないし、新産業を生み出すための技術もない。そこで、私たちは「知恵」を提供したい。具体的には、①十分杯を「埋もれていた地域資源」として再認識し、長岡における新たな生産要素として活用すること。②企業や地域に提案を行い、新しい産業あるいは市場を芽吹かせることの2点を「知恵」と捉えている。

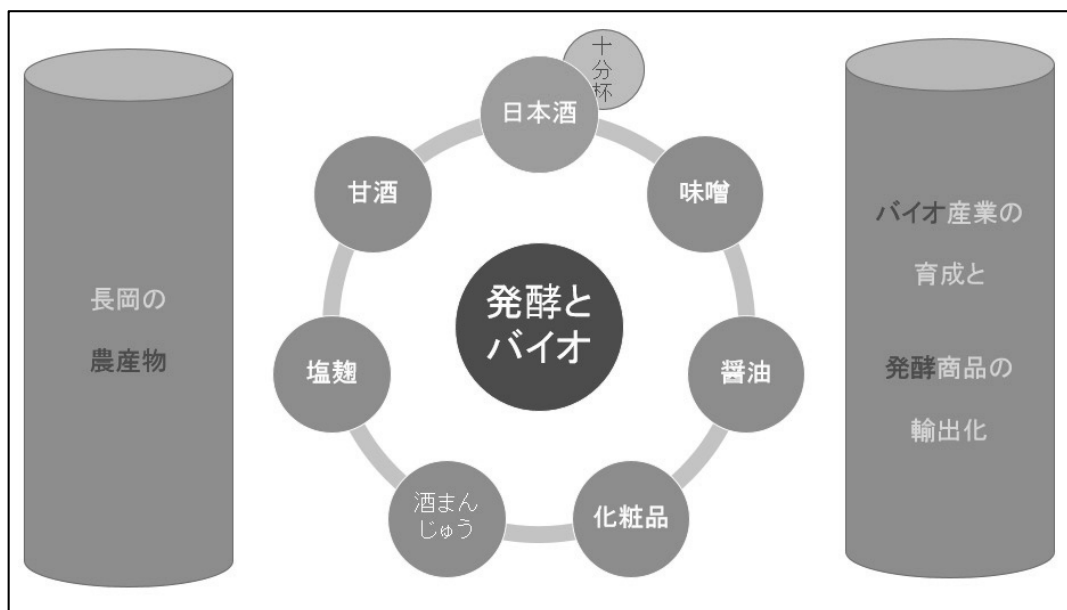
1. 3 十分杯の位置づけ

ここでは、私たちの考える地域資源としての十分杯の位置づけについて触れたい。

先述のように、私たちは経済が発展している地域や国は、基本的に地域資源の活用已成功しているところだと考えている。無から有ではなく、あるものを活用していく中で経済は発展していくとすると、長岡は100年以上の歴史がある機械産業と米菓産業を除けば、地域資源を生かして発展をしている分野は少ないのではないか。農業が役割を果たしていないというよりは、それを活用するための工夫が足りないように見受けられる。長岡は米や大豆を活用した発酵食品の宝庫であるが、「発酵食品の街」というイメージは強くない。また、バイオ産業と発酵は関連が深いはずであるが、今のところ市内のバイオ関連企業の話を目にするのはあまりない。

私たちは長岡の農産物を発酵食品に加工することで付加価値を高め、その過程での技術を生かし、将来的に長岡がバイオ産業の拠点になることを期待している。話が非常に大きくなったが、現在の長岡の発酵食品の中核とも言える「日本酒」を、これまで以上に盛り立てる脇役として十分杯を位置づけ、活動している。

<図 2> 十分杯の位置づけ

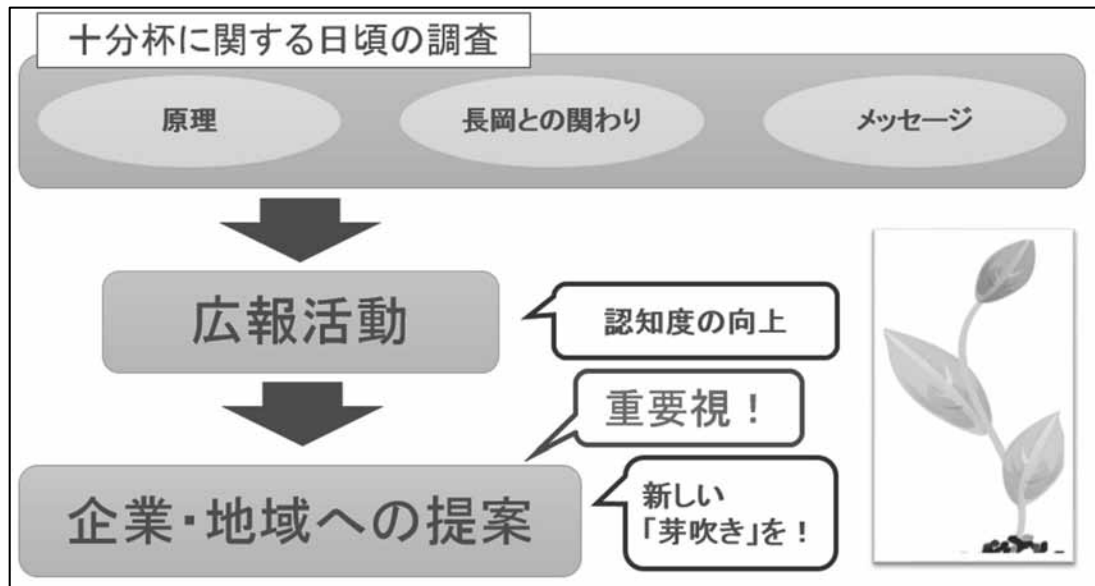


1. 4 活動のモデル

続いて、活動の方針について紹介する。<図 3>は、私たちの取り組みのモデルである。取り組みの基礎となるのは、十分杯についての「長岡との関わり」「メッセージ」「原理」の3点からの調査である。そして、その先は2本の柱から成る。1本目は、調査結果を広報することで認知度を向上させるという「広報活動」である。2本目は、調査結果をどのように地域活性化に結び付けるかを考え、企業や地域へ提案していく「提案活動」である。これらを、活動のモデル≒基本姿勢としている。

なお、昨年度からは「提案活動」を重要視し、本活動の主題を「十分杯で長岡を盛り上げよう！」に変更しゼミ内意識の向上と、地域への周知を図っている。

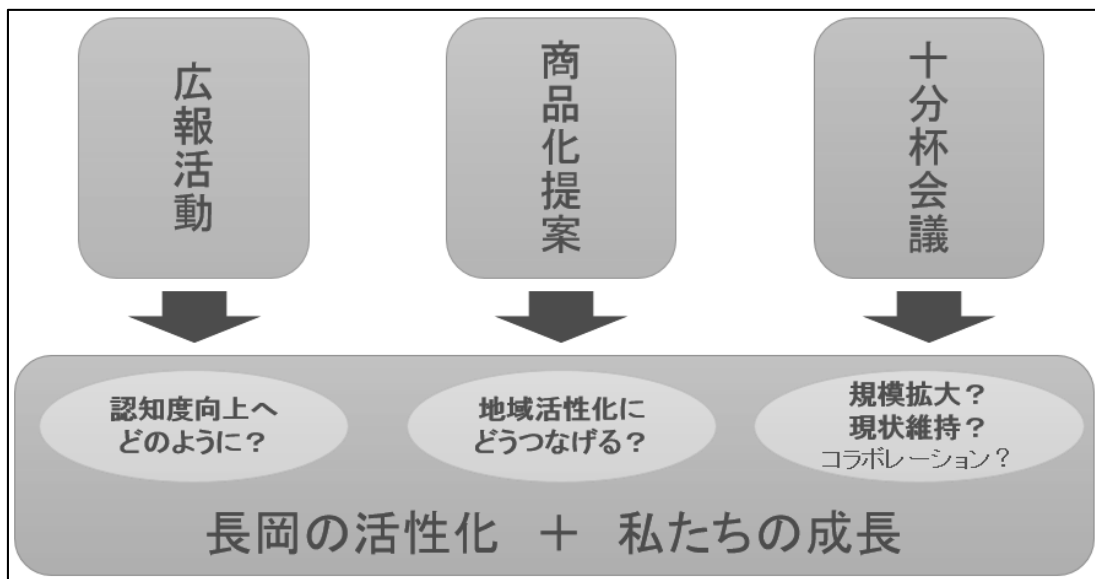
＜図 3＞取り組みのモデル



1. 5 具体的な活動方針

＜図 4＞はより具体的な活動方針を示す。なお、調査活動は継続的に取り組むため、ここでは除外している。活動の基本は、大まかには 3 本柱で、①広報活動、②商品化提案、③十分杯会議である。広報活動においてはさらなる認知度向上を目指し、考えを深めていく。商品化提案においては、その提案や商品を地域活性化にどうつなげていくのかを深く突き詰めていきたい。そして、十分杯会議に関しては、今後の方向性や議題、運営主体、

＜図 4＞具体的な活動方針



規模などについて議論の余地がある。そして、これらのことを地域の皆さまからのご助言をいただきながら、考え、提案することで、長岡地域の活性化を目指したい。また、これらの貴重な経験を通じて、ゼミ生自身が成長することも大きな目標としている。

2. 今年度の活動紹介と成果

2. 1 昨年度までの活動

本章では、まず昨年度の活動について振り返り、それを踏まえて今年度の活動を紹介・評価していきたい。昨年度は、権ゼミナールにとり、発展の年となった。活動開始以来、一貫して行ってきた調査・広報活動の集積が実を結び、「十分杯会議」を立ち上げるに至ったのである。なお、権ゼミナールと十分杯の出会い、および活動開始以来の調査・広報内容の詳細については平成 24 年度以降の『学生による地域活性化プログラム報告書』（長岡大学）を参照されたい。〈表 2〉には、これまでの活動のうち主要なものだけを示す。

〈表 2〉平成 26 年度末までの権ゼミによる主な活動の内容

日付	場所	イベント名・活動内容
H23, 6 月 14 日	長岡大学	ヒューマンパワーアッププロジェクト 落選
H23, 10 月 22, 23 日	長岡造形大学	長岡デザインフェア 2011
H24, 5 月以降 毎月 8 日	アオーレ長岡	街頭自主広報活動
H24, 10 月 6 日	アオーレ長岡	うんめえ酒にアオーレ ～越後長岡酒の陣～（通算 1 回）
H25, 10 月 5 日	アオーレ長岡	うんめえ酒にアオーレ ～越後長岡酒の陣～（通算 2 回）
H25, 10 月 26,27 日	長岡大学	悠久祭での展示会（通算 1 回）
H25, 下半期	長岡大学	長岡大学学食協に十分杯を常設展示
H26, 5 月以降	アオーレ長岡	街頭自主広報活動
H26, 10 月 4 日	アオーレ長岡	うんめえ酒にアオーレ ～越後長岡酒の陣～（通算 3 回）
H26, 10 月 25 日	長岡大学	第 1 回 十分杯会議の立ち上げ
H26, 10 月 26 日	長岡大学	悠久祭での展示会（通算 2 回）
H27, 3 月 4 日	新潟日報メディアシップ	進化するインターンシップ 新潟フォーラムでの発表

ここで、昨年度の活動において最重要事項であった「第 1 回 十分杯会議」について少し振り返っておきたい。十分杯会議は、前章の基本姿勢・モデルを実現するために設けた、

権ゼミナールと地域の方々との意見交換の場である。様々な立場の方と学生がともに机を囲むことで、より多方面に向けて意見の発信・受信ならびに私たちからの提案を実現するものである。なお、十分杯会議の意義・目的等については平成 26 年度の活動報告書に詳しく述べてあるので参照されたい。

さらに、第 1 回十分杯会議での提案事項がどの程度実現したかを確認してみたい。〈表 3〉に示すとおりである。

〈表 3〉第 1 回十分杯会議での提案事項と現状

主な意見・提案	評価	結果・現状
観光列車 越乃 Shu*Kura との コラボレーション	○	車内での日本酒試飲および十分杯紹介 イベントとして実現。
十分杯大百科 手軽に知ってもらえる資料	○	リーフレットとして実現。市内各所で 配布済み。
県外・首都圏での PR 推進	△	観光コンベンション協会の皆様から、 各地のイベントで十分杯を紹介して いただいた。
小学校・文化祭での紹介	×	検討中。実施には至らず。
十分杯の長岡市指定文化財 への登録を目指す	×	目標とはしているが、具体的な進展は ない。
大手通り・駅前に十分杯の モニュメント設置	×	ただし、実現に向けヒアリング・相談 などを行った。
県外や姉妹都市との連携	×	手つかずのまま

このように、提案・検討事項のすべてが実現したわけでは決してない。しかし、長岡観光コンベンション協会を通じての JR との連携など、これまでにないスケールの活動が実現できたことなどは、大いに意義のあることである。また、検討事項の実現可能性を高めていく意味でも、こういった当事者による意見交換の場は必要不可欠であり、その点でも意義を見出すことができた。

以上が、昨年までの活動、特に十分杯会議についての総括である。

2. 2 今年度の活動

2. 2. 1 越乃 Shu*Kura とのコラボレーション

今年度の活動の中心は、観光列車「越乃 Shu*Kura」(以下、シュクラ) とのコラボレーションである。昨年の十分杯会議で提案したことを、長岡観光コンベンション協会から JR

へと話をつなげていただき、実現の運びとなった。内容としては、列車内にて十分杯の紹介と地酒の試飲イベントを行った。私たちは主に十分杯の紹介を担当し、長岡観光コンベンション協会の方は、地酒の紹介をすることで、「日本酒」と「十分杯」の2点から長岡をPRした。当初は、月に1回ずつ4カ月間の予定であったが、延長を重ね9カ月で11回の開催となった。なお、イベント開催時に行ったアンケート（観光コンベンション協会が実施）の結果によると、来場者数は少なく見積もっても、通算で422名であり、その内訳は県内からが19%、県外からが79%であった。この結果を見ると、県外向けのPRにおいてシュクラの果たす役割の大きさが見て取れる。

この活動の反響として、十分杯販売店の方から、シュクラでのイベント開始以降「問い合わせが増えた」とのお言葉をいただいている。また、10月頃から車内においてお客様から、「十分杯目当てで来ました」という言葉を何度かいただいた。このようなことから、私たちの活動が長岡に少しでもつながっているという実感を得て、やりがいを感じている。

<図5>越乃 Shu*Kura 車内イベントの様子



2. 2. 2 十分杯リーフレットの作成

シュクラと同様に、昨年の十分杯会議から実を結んだのが「十分杯リーフレット」の作成である。十分杯会議で多くの方が賛同された意見に「もっと手軽に十分杯を知ってもらえる資料があったらどうか」というものがあった。この声に応える形で作成を決意した。

作成においては、「簡潔」で「持ち運びやすい」ことを重視して、内容を吟味し要点をコンパクトにまとめた。また、折りたたんだ時に服のポケットに収まるように、それにより持ち運びの邪魔にならないよう、用紙サイズを調整した。これら2点から「手軽さ」の実現を図ったのである。完成したリーフレットは、6月末の長岡市郷土史料館への配布を皮切りに、7月13日、20日の市内各所への配布、シュクラや後述する酒の陣、まちゼミなどあらゆる場面で配布させていただいた。結果としてこれまでに、約2万部を配布している。そして、関係者や受け取ってくださった方からも「見やすい」「分かりやすい」等のお

言葉をいただいております、嬉しく思っています。

なお、後述する歴史調査の結果等を踏まえ、より充実した内容への更新も検討中である。

<図 6>完成した十分杯リーフレット



<図 7>7月 20 日 川口地域における配布の様子

2. 2. 3 悠久山「歴史観光コース」の検討

6月頃から、悠久山「歴史観光コース」実現への検討を始めた。そして、7月21日に長岡市観光企画課、長岡観光コンベンション協会、市内タクシー会社（相互タクシー）から代表者を招き、観光商品化の可能性に話し合った。まず、私たちが悠久山・栖吉地区の特徴や名所と考えるものを紹介し、さらに悠久山の活性化のための新しいイベントなどを提案した。それを受ける形で、意見交換へと移った。その中で、

- ・悠久山は、現状では「立ち寄る」場所になっており、「目的地」といえるほどの魅力をアピールできていないのではないかと。
- ・タクシーツアーを考える場合、「運転士+説明ができる人材」の確保が大切だが、それを教育していくのは難しい。

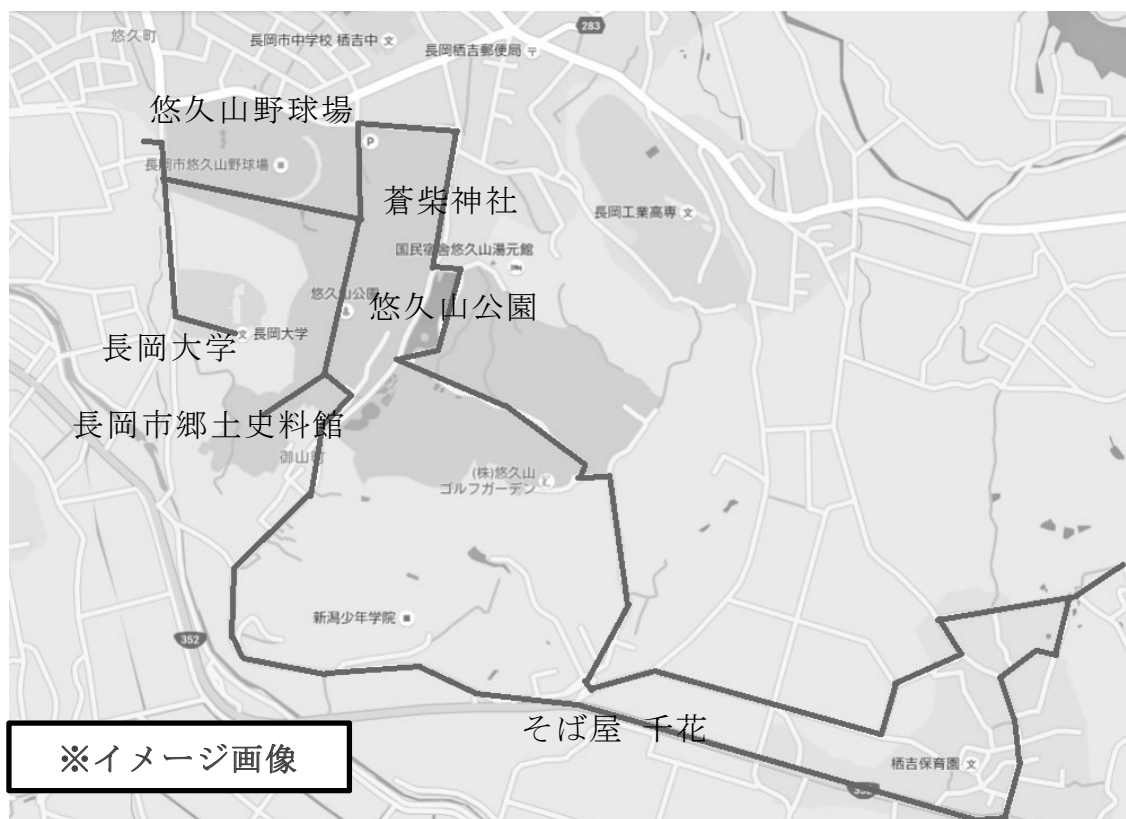
などの現状が確認された。しかし、

- ・タクシー用の観光案内・解説放送をつくったらどうか。

などの今後につながりそうな事項もいくつかあった。

いずれにしろ、十分杯自体の活用とは少し違った形での活用提案として、来年度以降も継続的に議論していきたい。

<図 8> 「悠久山・栖吉 歴史観光コース」のイメージ



2. 2. 4 各種イベントへの参加

5月24日に開催された「長岡市合併10周年イベント」は、今年度初のイベント参加となった。来場者数もかなり多かったため充実したイベントとなった。一方、イベントの終盤に来場された外国人の一人に対し、満足のいく説明ができなかった。このことは、今後の検討課題であるし、私たち自身、語学面にも努力が必要だと実感した。

10月3日には、私たちにとっては4年連続4回目となる「美味しい酒にアオーレ 越後長岡酒の陣」に参加させていただいた。今年度も、ブースを設けていただき販売店の方と共同使用する形での運営となった。どの年度においても酒の陣は、権ゼミナールにとって最大の外部イベントであり、今年度も会場は大盛況であった。その中で、私たちの新しい取り組みとして2つのことを行った。1つは、内山弘さんからお借りした「卓上噴水器（コンストフォンティン）」の展示である。これは、サイフォンの原理にも関係するとされている「空気圧」をより視覚的に知ってもらうためのものであった。これは、子供たちを中心にかなりの注目を集め、好評であった。2つ目は、「川柳大会」の実施である。ブース内に、酒にまつわる川柳を展示し来場者に少しの笑いや安らぎを提供しようと、考案したものである。途中から太刀川喜三さんの作品を10点ほど展示させていただいた。しかし、こちらの企画は、急ごしらえの企画だったことや、広報を全くしていなかったこともあって盛り上がり欠ける結果となってしまった。また、この日の来場者の中に長岡における著名な陶芸作家の奥様がおられ、作品についての貴重なお話を聴かせていただいた。

ともあれ、イベントは2つとも盛況に終わり、十分杯の認知度向上に寄与するものだったと思っている。

<図 9>長岡酒の陣 当日の様子



<図 10>卓上噴水器（コンストフォンティン）

2. 2. 5 まちゼミでの広報活動

<図 11>まちゼミ お客様との記念撮影



9月6日と18日に開催された、第3回長岡まちゼミに参加した。これは、市内を代表する十分杯販売店の「わがんせ」さんが受け持つ講座に、解説役として参加したものである。両日とも来場者は10名弱であり、小規模ではあるがそれゆえにじっくり説明することができ、充実した活動となった。また、第4回長岡まちゼミへの参加も決定しており、1月29日および2月19日に同様のイベントを行う。

2. 2. 6 FM ながおか 番組出演

11月21日にFM ながおかにて、同社番組『ながおか・人の輪・地域の輪』の収録にゼミ生2名が参加し、販売店の方と共に十分杯の紹介を行った。15分間の番組で2回分出演させていただき、十分杯の歴史・精神に加え、権ゼミナールの活動内容についてもPRした。

これまで、新聞以外のメディアにゼミナールとして出演したことはなく、私たちにとって初めてで、また貴重な経験となった。

<図 12> FM ながおか 収録参加



2. 2. 7 十分杯ブログの更新・十分杯ツイッターの開始

<図 13>新たに開始した、十分杯ツイッター



昨年度開設したブログを、今年度も引き続き運用している。今年度は、メンバーの増加に合わせて更新頻度を高めることと、全員が記事を書くことを実行した。これにより、内容の充実と、記事に個性を持たせることの実現を図った。

十分杯ツイッターは10月末に開始した。すると、ツイッター上の情報を元に他大学の学生が十分杯会議を訪ねてくるなど、有効性を実感する出来事があった。

いずれにしても、これらを活用して県外や遠方の方にも十分杯をアピールして行きたい。

2. 2. 8 「第2回 十分杯会議」の開催

昨年度に引き続き、権ゼミナールにとっての最重要活動が十分杯会議である。今年度も悠久祭初日の10月24日に開催した。前回の十分杯会議は、商品開発や販売のほうに主眼を置いたメンバー構成であった。それに対し今回は、生産者の意見を聞こうと考えた。これは活動開始以来、私たちの中に「なぜ十分杯はこれほどまでに市場での流通数が少ないのか」という疑問があったことと、広報活動において常に「在庫がない」という問題に直面していたためである。なお、十分杯の生産の現状については第3章にて詳述する。また、生産者をサポートする存在の方が同席することで、例えば補助金や支援制度などの話に発展するかもしれないと考え、長岡商工会議所や北越銀行経済研究所の方にも参加を依頼した。そして、もう一つの議題として観光コースを含む県外へのPRについて考えるため、長岡市観光企画課および、JTBの方にも意見を求めることにした。さらにゼミアドバイザーと長岡市議会議員、そしてゼミ生を加え、総勢13名での開催となった。

<図14>第2回 十分杯会議 当日の様子



討論に先立ち、まず私たちが活動報告と提案を行った。なお、この提案内容については後述する。その後、各参加者からの意見発表・提案があり前半は終了した。会議後半では、前半の内容を元に自由討論が行われた。今回の会議での主な意見・提案としては、

- ・認知度を上げようとするあまり、現物を紹介することが先行し過ぎていて、「精神」の部分の紹介がおろそかになってはいけない。
- ・おみやげを考える場合、旅行者で一番お金を使ってくれるのは「中高年」であるから、そこをターゲットにするとよいのではないか。
- ・おみやげとして、旅行者に十分杯の「うんちく」を提供すること。
- ・日本酒を含めて、若者にPRしていくには「成人式」が大きなチャンスとなるのではないか。

などがあった。また、私たちの提案した「ふるさと納税の返礼品としての十分杯の活用」や「シクラ限定十分杯」については、参加者からは一定の評価をいただいた。

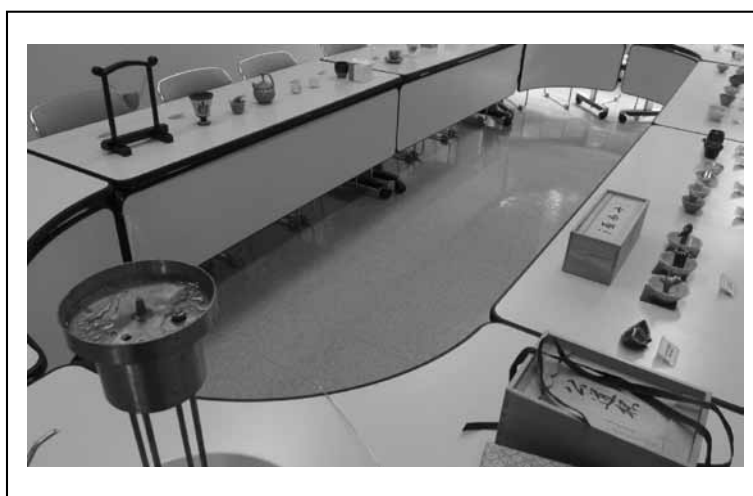
その一方で、資料の準備不足やこちら側からの議論への参加が積極的ではなかったことなど、次回以降に向けていくつかの課題も浮き彫りになった。

ともあれ、来年度以降も十分杯会議が私たちの活動の中核たることに変わりはなく、より一層の充実を目指して励んでいきたい。

2. 2. 9 悠久祭での十分杯展示

これも昨年度に引き続き、悠久祭 2 日目の 10 月 25 日に開催した。本学内の一室にて十分杯と歴史関係の資料、卓上噴水器などを展示した。今回は、会場の近くに他の模擬店やイベントがなく、そちらからの客足は期待できない状況であった。しかし、いざ始まってみると、ちらほらとお客様があり、合計で 20 名弱程度とほぼ例年並みの結果であった。

< 図 15 > 悠久祭での十分杯展示



2. 2. 10 「大学人サミット」への参加

11 月 7 日、8 日に松本大学にて開催された「第 9 回大学人サミット信州・まつもとカレッジ 2015」に、本学代表としてゼミ生 2 名が参加した。本学の特徴や取り組みについて紹介した後に、権ゼミナールの活動内容を報告した。発表後の交流会において、他大学、他県の方から十分杯について多くの質問や、助言をいただいた。また、他大学の発表で取り組みの様子を比較すると、「十分杯」はずば抜けて知名度の低い題材であり、その点の難しさを再認識した。

< 図 16 > 松本大学での発表



2. 3 活動の成果

今年度の活動の中で、反響が大きかったのはシュクラとリーフレットであった。シュクラでのイベント開始後、私たちが一般の方のブログに取り上げられることが何度かあった。リーフレットについては、新聞社から取材を受けたりもした。

また、十分杯と直接関係する・しないは別として、様々な方面と「つながり」を持つことができたのは、私たちにとって大きな収穫であった。最近では、そうして知り合った人を通じて新しい提案が舞い込んでくることもある。そう考えると、活動の中で得た人との「つながり」こそが、最大の成果であったと考えられる。

3. 十分杯の生産の現状—供給過不足の問題—

3. 1 問題点

本章では、十分杯の生産の現状について確認していきたい。というのも、十分杯の広報活動をしていて頻繁に陥るのが、「在庫がない」という状態である。「欲しい」というお客様がいて、こちらとしては紹介したいのに販売店には在庫がないという状況がしばしば生じているのである。また、私たちが広報活動をしていて出会った方の多くは「陶器の十分杯」の購入を希望されておりその点からも、販売機会のロスが悔やまれる。これらのことから、「なぜ十分杯は、これほどにも市場での流通量が少ないのか」を考えてみる必要があると思ったのである。

3. 2 原因はどこにあるのか

3. 2. 1 岡崎氏へのヒアリング

私たちは、先述の問題の原因を探るには生産者の意見を聞くべきだと考えた。そこで、まず岡崎宗男氏に対し、ヒアリング調査を行った。岡崎氏は、長岡市内で活躍されている陶芸作家であり、実際に十分杯を製作されている作家の一人でもある。6月に1回目、7月に2回目のヒアリングと工房見学を実施した。

<図 17>ヒアリング後の写真 岡崎氏は中央左



この2回の調査を通じて見えてきたものがあった。それは「十分杯は陶芸作家にとって、非常に扱いにくいモノだ」ということである。その理由を、岡崎氏の返答を交えながら「技術」「経営」の2点から整理していきたい。

まず、技術的な問題がある。それは、「とにかく製作が難しい」ということである。十分杯の作り方自体は、数パターン存在するというがどれも成功率はあまり高くないのだという。岡崎氏の場合、成功率は6割前後とのことで、その他の陶芸作品に比べてロスが生じやすいとのことである。また、構造のこともあり、「焼き物についてしっかりと勉強した人

でない」と手を出しにくいのではないか」との指摘もいただいた。

次に、経営の観点からの問題が考えられる。先述のように、他の陶芸作品に比べロスが多い十分杯は、陶芸を「生業」とする作家にとっては、損失の増加を招く可能性がある。また、他の作品に比べ工程が多い十分杯は、製作期間が長くなるため「造形→焼く」という作業全体のサイクルを乱しやすいのだという。これは、作業効率の低下に直結するものである。

そして、最も難しい部分として「需要」の存在がある。先述のように、陶芸を「生業」とする作家にとっては作品のほとんどは、すなわち「商品」でありそれを売って所得を得なければならないのである。その人たちにとって「十分杯」とは、「売れるかどうか分からない」というリスクを抱えているものであり、なかなか踏み込みにくいのだという。また、皿や茶碗などの「需要がある」品を優先的に窯の中に配置するため、十分杯は空きスペースに納めるしかない。それゆえに、大量生産にはつながりにくい。

岡崎氏によると、これらの問題点から「同業者の中でも、十分杯に手を出すことを嫌がる傾向が強い」とのことである。以上のことが、岡崎氏との意見交換から浮き彫りになった。

3. 2. 2 柴木氏へのヒアリング

続いて、岡崎氏以外の生産者の方にも話を聴こうと考えた。そこで、柴木樹氏に対し、ヒアリング調査を行った。柴木氏は、株式会社アルモの代表取締役社長であり、アルミ合金製十分杯「ほどほど」を製作されている。10月にヒアリング兼工場見学を実施した。

<図 18>ヒアリング中の写真（柴木氏は中央左）



柴木氏へのヒアリングでは、「3Dプリンターの技術を十分杯に活用できないか」という点を中心に話が進んだ。その結果、

- ・素材となる樹脂は着色可能で、見た目は本物の十分杯に似せることが出来る。

- ・ 3Dプリンターによる造形物は内部がトラス状の骨組みになっていて、それにより強度を保っているため、杯の外側部分を作ることは出来るが、内部まで一気に作るのは難しい。
- ・ 内部まで作ると樹脂の使用量が多くなりコストが増加する。

などの特徴が確認された。そして「3Dプリンターは、試作用として大変有用であるが、商品そのものの生産には向かない」という認識のもとに一致した。

また、もう1つ興味深い話があった。それは、私たちが「燕三条の金属製カップは、新幹線内のお土産パンフレットに載っているのに、アルミ製十分杯は載っていない。掲載してもらえない方法はないのか。仕掛けがある分、十分杯のほうが面白いのではないか。」という意見を伝えた時のことだった。柴木氏の答えは、「燕三条と長岡（アルモ）では売り方が違う」というものであった。長岡はB to Bの取引が中心で、家庭用品なども作る燕三条とは違っている。また、家庭向けあるいは小売向けの販路を持っていないため、最初の売込みをかけるのが困難であること。そして、大衆向けの商品になることで“薄利多売”へと向かっていくことになるが、それへの対応が難しいことなどが大きな違いであるという。この話を聞いて、私たちは以前からの持論であった「問屋探し（仲介役）」の重要性を改めて感じた。

3. 2. 3 見えてきたもの

両氏へのヒアリング結果や、これまでの広報活動での経験を踏まえて十分杯が抱える課題を以下の3つに整理した。

- ① 陶器の十分杯の数が特に少なく、また、安定供給に至っていない。
- ② 十分杯の需要について正確な調査ができておらず、判断できない。
- ③ 販売店、生産者共に少なく競争が生まれにくい（寡占状態）。

これらの解決策を考えていく必要がある。私たちもいくつか考えてみたが、すべての課題の解決策を考案するには至らなかった。そこで、本年度の報告書では以下の項目にて課題①についての解決策を提案していきたい。

残念ではあるが、課題②および③については次年度以降に託すこととしたい。

3. 3 解決策の提案

3. 3. 1 大量生産の提案

現在、市場で流通している陶器の新品の十分杯は、基本的には岡崎氏含め2名の作家により製作されているものである。どれもデザインが異なっていてまさに無二の品ばかりであるが、それゆえにおみやげにするには「少し高いかな」というくらいの価格設定になっている（2500円～5000円程度）。おみやげとして幅広く販売していくためには、高価格帯の商品と低価格帯の商品の両方を用意する必要があると考える。その方が、消費者に選択の余地が生まれ、その人のニーズによって選んで購入することができるようになるからである。

これを実現するためには、「低価格」の十分杯を実現しなくてはならない。そのための手段として、「外注」がある。つまり、単一の規格の十分杯を焼き物業者に持ち込み、100個・1000個といった単位で生産しコストの低減を図るのである。これについては先行事例がある。数年前に長岡市内で販売された「招き猫十分杯」は、瀬戸の焼き物業者に持ち込んだ大量生産で作られたものであった。たしかに、作家による作品と比べると良くも悪くも「シンプル」であるが、機能面や実用性の面では全く見劣りしない。製造にかかるコストも低く数万円～十数万円程度でのかなりの量が生産できるとのことである。それゆえに、販売時の価格も比較的lowめに設定されており（1000円～2000円程度）、より気軽に購入できるものになっている。このような、廉価な十分杯を散発的ではなく継続的に生産していけば、在庫不足の問題の解決に寄与するものとなるのではないだろうか。

<図 19> 低価格十分杯の例 「招き猫十分杯」



<図 20> アルミ合金製十分杯 「ほどほど」

もう1つ、アルミ製十分杯をさらに売り出していくという手段も考えられる。アルミ製十分杯は、大量生産と生産の安定性が最大の武器であり、100個単位での一括生産が可能である。また、デザインに関しても、漆塗りのものを開発中とのことであり、これからの発展が期待される。

これらを総合すると、「アルミ製」「低価格版」「作家による作品」による3本柱での販売

体制が出来上がる。これによって、顧客のニーズに沿った柔軟な販売が可能になる。例えば、「毎日の晩酌に使いたいなら、手入れがしやすいアルミ製」とか、「旅行のおみやげには、低価格のものを皆に渡して、我が家にはちょっと高価な作品を」といった具合に対応することができる。このように販売体制が整っていけば、顧客が買いやすくなるだけでなく、イベント等で積極的に広報するための足場が固まってくることになり、好循環に繋がっていくのではないかと期待している。

3. 3. 2 地元生産拡大の提案

先述した外注による大量生産には大きな欠点がある。それは、「メイドイン長岡」ではなくなってしまうということである。十分杯に強く興味を持ってくれる人ほど、「メイドイン長岡」へのこだわりは大きいかもしれない。また、「長岡のみやげなのに長岡でつくっていないのか…」というマイナスイメージを生んでしまう可能性もある。このことから、やはり地元生産の拡大も必要であると考えた。

そこで、長岡市に「陶芸作家・窯を“誘致”」することを提案したい。これまでの“誘致”といえば、商業集積や工業団地に見受けられる「雇用」「経済」を重視したものであった。しかし、これからは「有から有」を可能にする企業・個人を積極的に集めるべきではないか。陶芸作家を長岡に呼び寄せ、十分杯をつくってもらうだけでも、文化の継承という重要な役割を果たすことになる。また、作品づくりを通じて長岡に陶芸の技術が培われていけば、いつかは「有から有」に結びつくようなすばらしい結果を生むかもしれない。いずれにしても、これからの企業・産業誘致は、その地域の「資源」を活かし「特色」を生み出すような企業・個人を狙っていくべきだと考えている。

ただし、このことについて具体的な考察には未だ至っていないため、本年度はここまでの記述にとどめ次年度以降の検討課題としたい。

4. 十分杯が長岡に伝えられた前後の江戸経済の状況

十分杯が伝えられた当時の長岡藩が、江戸からの影響を受けていたのかを知るため、江戸時代（長岡に十分杯が伝えられた時代）の経済状況について論じる。最初に、その影響の正否を明らかにする。その後それを踏まえた上で、十分杯が伝えられた当時の江戸の具体的な経済政策について示す。最後にその政策を行うに至った理由を述べる。

4. 1 長岡藩の江戸からの影響の正否

当時の長岡藩が江戸の影響を受けていたのかについて考える。ここで考える影響とは、倹約に関する影響である。十分杯が伝わった当時の長岡藩は、十分杯を通じて藩士に倹約の精神を説いたと言われている。これは長岡独自の考え方であるか、または江戸の経済政策に影響を受けて考えられたものであるのかを明らかにする。

私たちはその影響はあると考える。その理由は江戸では倹約に関する経済政策が行われていたからである。その具体的な政策は次の3で述べる。

4. 2 十分杯が登場した頃の江戸の経済政策（1682-1689年の江戸経済）

この時代は、5代将軍徳川綱吉（以下、綱吉）の治世であり天和・貞享・元禄初期の時代にあたる。この期間に幕府が行った政策の中で、倹約に関わる経済政策を述べていく。それをまとめたものが<表4>である。

<表4> 倹約に関わる江戸の経済政策（天和・貞享・元禄初期）

	江戸の経済政策（倹約に関わる政策）	長岡藩
1682年	諸職人・商人の看板に金・銀箔の使用を禁止 天下一の刻時禁止	
1683年	美服制限令を発令 幕府が備蓄貯蓄を命じる 奢侈品の輸入を禁じる	
1684年	出版取締令を発令	
1685年	唐貿易額の制限 オランダ貿易額の制限	外国貿易額の制限
1686年	朝鮮貿易額の制限 琉球貿易額の制限	
1687年		十分杯が伝えられる
1688年	酒造制限令を発令 美服制限令を発令	
1689年	女性の小袖・服の販売を販売する際の上限設定 奢侈品の高価入札を禁止	

4. 2. 1 十分杯登場前の江戸の経済政策（1682-1686年の江戸経済）

<表4>に示した美服制限令、備荒貯蓄^{びこうちよちく}、奢侈品の輸入禁止、出版取締令、外国貿易額の制限について説明する。

美服制限令、備荒貯蓄、出版取締令は国民に行わせる政策である。一方、奢侈品の輸入、外国貿易額の制限は幕府自体が行った政策である。

1つ目の美服制限令（天和の禁令とも言う）は、服装の奢侈を禁止して儉約を推奨する政策である。具体的な例として着物をあげたい。この政策で金紗^{きんしゃ}と呼ばれる刺繍が入った着物や総鹿の子絞りと呼ばれる衣服の着用・製造・販売は禁止された。金紗とは縦糸（経糸）に練った生糸、横糸（緯糸）に金糸や色糸を用いた刺繍である。鹿の子絞りとは布を糸で括り、器具で挟むことで防染加工した着物である。これらの手の込んだ着物は贅沢品と扱われた為に禁止された。その他にも、同制限令では小袖一反の200匁¹以上の売買を禁止した。目的としては上記の通り奢侈を禁止して儉約を推奨することが考えられる。しかし、この法令は表向きであり奢侈品を取り締まることは困難であった。

2つ目の備荒貯蓄は、飢饉や災害に備えてあらかじめ米銭を蓄えておくことである。これは幕府や藩、民間などで行われていた。

3つ目の奢侈品の輸入禁止は、羅紗^{らしゃ}・猩々^{しやうじやうひ}緋と呼ばれる毛織物や金糸、薬用以外の植物などの輸入が禁止することである。羅紗とは、紡いだ毛を原料として起毛させた厚手の毛織物である。猩々緋は羅紗の中でも最高級品のものを言う。

4つ目の出版取締令は、街中での小唄、はやり事、その他変わったことを版にして辻や橋で売ることを禁止したものである。これを破ったものは逮捕を命じられた。

5つ目の外国貿易額の制限は、当時貿易を行っていた唐・オランダ・朝鮮・琉球との貿易を制限するものである。具体的に唐との取引を金100万両²、オランダとの取引を金5万両、朝鮮との取引を金1万8000両、琉球との取引を金2000両に制限した。当時の日本は主な輸出品として金や銀などが用いられた。また当時輸入の超過が起きており、海外に大量の金銀が流出する状況が起きていた。それを改善する為の政策である。

その他にも、諸職人・職人の看板に金や銀の箔を押すこと、諸商人が看板や製品に「天下一」の文字を刻むことも禁止していた。「天下一」の刻字禁止の理由は、実がないにも関わらず私欲の為に偽ることが風俗を乱すと将軍の綱吉が判断したためである。

4. 2. 2 十分杯登場後の江戸の出来事（1687-1689年の江戸経済）

ここでは、<表4>で示した酒造制限令、美服制限令について説明したい。酒造制限令、美服制限令は共に国民に行わせる政策であった。

1つ目の酒造制限令は、酒造業者に対して製造の制限を加えるものである。その背景として3つ挙げられる。第1に、物価統制（特に米価の統制）である。第2に、都市の需要拡大である。当時、都市人口の急増が起こっており米などの諸物産の供給が間に合わない状況にあった。それで、米を都市人口の食糧に回すために酒の製造が制限されたことが考えられる。第3に、乱れた風紀の是正である。綱吉の時代は江戸幕府が開かれて約80年も

¹ 1匁=3.75g、1貫目=3.75kgである。

² Teio Collectionによれば、江戸時代初期の1両は、円換算すると約10万円である。

経ち、社会も経済も安定した時期であった。それによりかつてはお酒が買えなかった人たちも買えるようになり、風紀が乱れることがあった。それを是正するために酒造りを制限したと考えられる。

2つ目の美服制限令は 1683 年の同令と同じ内容である。この政策による効果は全くなかった。

その他にも、京の呉服商が女性小袖や女性服を販売する際の金額の上限設定、輸入品の高価入札を禁止した。

このように江戸では儉約に関する多くの政策が行われていた。このことから、これらの政策が長岡藩に影響を与えたことが考えられる。

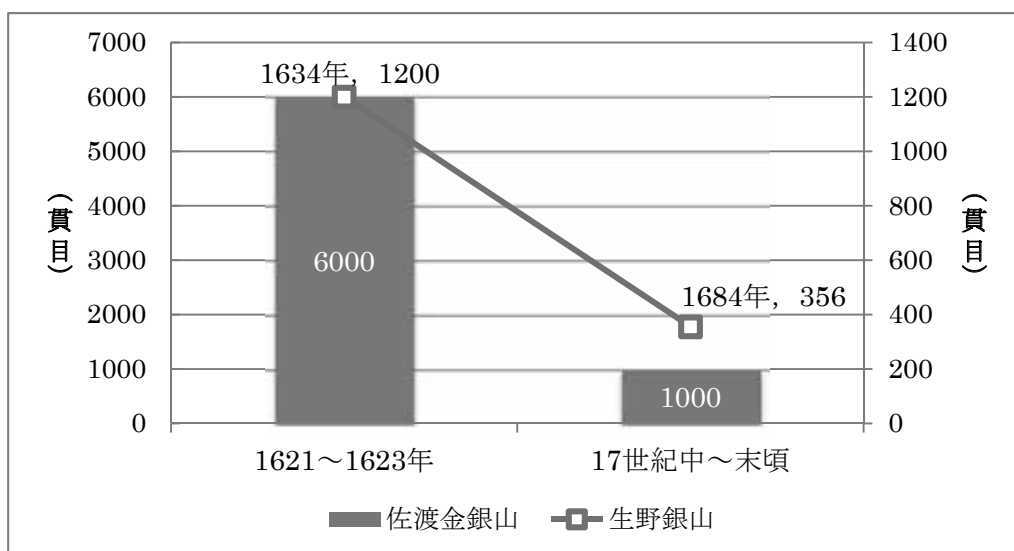
4. 3 儉約に関する経済政策を出した理由

当時の江戸で儉約に関する政策が行われた理由として、幕府の財政難が理由として考えられる。蓄えられていた金銀は 1661 年に約 400 万両（現在の 4800 億円）とされるが、1709 年には 37 万両（現在の約 444 億円）に低下した。この財政難が起こった背景は 7 つあると考えた。

まず 1 つ目の理由は、寺社の建立・再建である。当時の將軍の綱吉は、儒学や仏教・神道などを重視していた。そのため、護国寺・知足院と呼ばれる寺の創建や東大寺の大仏殿の再建、法隆寺諸堂の修復を命じたと言われている。その他計 106 寺社の建立・再建を行っており、そのための膨大な費用が財政難の一因である。

2 つ目は、外国貿易による金銀の流出である。先程述べたように、日本は輸出品として金や銀を用いた。また当時の日本の貿易状況は超過輸入であり、貿易により外国に金や銀が流出した。

<図 21> 佐渡金山（左軸）と生野銀山（右軸）の鉱山採掘量の変化



(出所) 国史大辞典編集委員会 (1990)、日置榮継 (2010) をもとにして作成。

(注) 佐渡金銀山の 17 世紀半~末の採掘量を 1000 貫目として計算している。

3 つ目は、鉱山採掘量の減少である。当時の江戸幕府は全国の鉱山からの金銀を主な収入源としていた。そのため、鉱山採掘量の減少は幕府の収入減少を意味し、それが続くこ

とで財政難に陥った。当時の主要な鉱山には佐渡金銀山、兵庫県の生野銀山、島根県の石見^{いわみ}（大森）銀山がある。鉱山採掘量減少の具体的な例として、佐渡金銀山の採掘量は1621年から1623年まで年6000貫目であったが、17世紀半～末期（家綱³～綱吉時代）には1000貫目台またはそれ以下に低下している（＜図21＞）。生野銀山の採掘量は1634年の1200貫目から1684年（綱吉時代）には356貫目に低下している。石見大森銀山も同じく寛永期から元禄期（1688～1705年）の間で低下している。

4つ目は、明暦の大火後の江戸城や市街の再建費用である。1657年（明暦3年）に発生した明暦の大火では、江戸城の本丸・二の丸が燃えた。この災害で、江戸の町の6割が灰となり死者は10万人以上に及んだ。城や町の復興の為に、多くの費用が掛かったと考えられる。

5つ目は、需要を超えた米の増産による米価の低下である。年貢増収を目的に新田開発を行い米の増産を行った。しかし貨幣供給量は増えなかったため米価が低下する状況が発生した。当時の幕府は農民が収穫した米を年貢米として徴収し、それを市場で換金することで収入を得ていた。そのため米価が下がることは、幕府の収入減少を意味し、出費を制限せざるを得なかった。

6つ目は、商品作物の生産拡大である。江戸時代初期、江戸では日常生活に必要な品物を生産する力が低く、諸商品の生産が多い上方から商品を購入する必要があった。それを改善するために江戸でも商品の自給が求められた。また当時の外国貿易の制限からも、商品の自給が求められた。そのことから商品作物の生産が行われた。商品作物の生産に合わせて需要が高まると、商品の物価が高くなり米価は相対的に低下した。上述したように、幕府は米を換金して収入を得ていたため、商品作物の生産拡大は財政難の一因であると考えられる。

7つ目は、武士の存在理由の変化である。江戸以前の戦乱の時代は、武士は戦士としての能力が求められた。しかし太平の時代となると、武士は領国を管理する力が求められるようになった。そのため学問を修めるようになり行政を司る官吏となっていく。そのことで公家との交流が多くなり、彼らが好んだ遊芸に手を染めるようになった。そのことで、武士は贅沢な生活を送るようになる。この武士の公家化が財政難の一因となったことがあり、儉約を強制したと見ることもできる。

4. 4 まとめ

十分杯が長岡に伝えられた当時、江戸では7つの社会的背景から儉約に関する政策が行われていた。このことから、長岡藩は十分杯を使って儉約の精神を説いたが、江戸の社会情勢と経済政策が影響していたと言える。

³ 家綱は四代将軍であり、綱吉の前の将軍である。

5. 13の提案

第2回十分杯会議（10月開催）や地域活性化成果発表会（12月）を通して、13の提案を行った。

5.1 ふるさと納税の返礼品の一つに

2015年は日本中でふるさと納税が話題となった年だった。長岡市がマスコミ上で注目を浴びたことはない。なぜなら、他の市町村と競合する返礼品が多すぎるからである。つまり、差別化されていないからである。そこで、十分杯を長岡市に提案した。私たちが確認したところ、十分杯を返礼品にしている市町村はない。年収の増加だけでなく、長岡らしさをアピールしていく上で非常に有効だと私たちは考えている。

5.2 観光列車越乃 Shu*kura の土産物（限定品）に

1年間活動してきた観光列車シュクラでの経験を踏まえてのJRへの提案である。現在、乗車記念としてシュクラのロゴが印刷されているおちょこが配られているが、多くの乗客は十分杯を欲しがっているように見受けられた。ただ、価格が問題である。これを解決するためには生産者側とJR側の三方よしの考え方に基づいた努力が求められる。

5.3 十分杯陶芸教室の復活

長岡には数年前までは十分杯陶芸教室があった。本学の十分杯コレクションの中にも数品はその時の作品である。私たちが活動をしていく中で、「家に飾っておくため」、「節目の記念として」十分杯を直接作りたいという声が多くあった。陶芸作家と協議しながら進めていきたい。また、長岡市の市民協同事業の一つとして採択できるように知恵を絞っていきたい。

5.4 十分杯という銘柄のお酒

長岡には16の日本酒の酒蔵がある。そして、「長岡藩」、「米百俵」のような地域性あられる銘柄がある。しかし、「十分杯」関連の銘柄は皆無である。おそらく、認知度が低いからだろうけれども、発想を変えてないからこそ作ったほうがいいのか。似たり寄ったりの銘柄が多すぎる中で、「十分杯」、「満れば欠く」、「足るを知る」のような銘柄は注目される可能性が高い。16の酒蔵の内、ぜひとも実現してほしい。

5.5 十分杯で酒蔵ツアー

これは長岡市内の酒蔵を数か所訪れ、見学や試飲、食事を行い、飲酒の際には十分杯を使ってもらおうというものである。最近、いくつかの酒蔵には団体の貸し切りバスの観光客が来るのを目にすることがある。その際、十分杯で長岡のお酒を試飲できるようにすればいいと思った。ただ、これも価格の問題がある。

5.6 干支の十分杯

「十分杯の飾りに十二支の干支を用いて家に飾ってもらう」ということである。これは

お酒を飲むためのものではなく、観て楽しむ観賞が目的の十分杯である。なぜ、飾りに干支をデザインするのかについてだが、干支は日本でも馴染み深く様々なものに使われており、親近感があるからである。年賀はがきにも干支を用いたイラストが使われているし、干支にまつわる神社も各地に存在している。また、お正月になると縁起物であるその年の干支の置物を玄関に置くという家庭も多いのではないだろうか。十分杯は結婚式の引き出物や土産物として贈られることもある。そこで、馴染みがあり縁起物である干支と、結婚式の引き出物や土産物として贈られる十分杯を融合させたものがあると面白くなるのではないかと思う。

5. 7 十分杯を盛り込んだカルタ作り

私（中澤 司）の地元、旧広神村には「おらが広神いろはがるた」というカルタがあった。広神の文化や特色を題材にしたカルタで、子供のころからこのカルタで村のことを知り、地元への愛着が強くなった。私が調べた限りでは、長岡市にはこのようなカルタがないようである。そこで、歴史や文化を幅広く題材にしたカルタを作ることで、十分杯だけでなく、なかなか子供には親しみにくい日本酒、酒文化のことも知ってもらえる機会になると考えている。

5. 8 大きな十分杯を設置

アオーレ長岡や駅前などに大きな十分杯の造形物を設置することである。その際は、鉢物の十分杯とすることで、長岡の産業をアピールする役割も持たせたいと考えている。

5. 9 十分杯通帳作り

十分杯通帳である。「儉約」の精神とうまくマッチした商品化と言えるのではなかろうか。長岡市には二つの銀行の本店と信用金庫の本店がある。これまでも提案してきたが、今後とも提案し続けたい。

5. 10 日本酒乾杯条例とマッチする十分杯作り

日本酒乾杯条例に従い乾杯する際、十分杯で乾杯するということです。まず、直径20cmほどの大きめの十分杯に酒を入れこぼれるのを全員で観賞します。その際、亀や鶴の絵が書いてある亀盃をこぼれた酒が溜まる受け皿をにします。そして、亀盃の中の酒を、各自の十分杯に酌み乾杯する。「戒めと祝い酒」として乾杯をするというのは長岡らしい飲みかたではないだろうか。

5. 11 長岡市指定文化財への登録

十分杯の長岡市指定文化財への登録である。文化財という「箔」が付くことは、認知度を高める上でも有効だと考えている。実際、本学裏の長岡市郷土史料館の場合、十分杯が最も目立つところに展示されている。つまり、郷土史においては重要だと位置づけされているということである。しかしながら、長岡市の数多くの指定文化財の中には入っていないのである。実状に合わせて十分杯を長岡市の指定文化財にすべきではなかろうか。

5. 1 2 杯サミットの開催

杯で酒文化を盛り上げるための議論の場にしたい。全国各地の杯についての情報交換や交流、活用法を探るなど、長岡を杯と日本酒の聖地にするための地ならしである。全国には様々なサミットがある。また、かつて長岡では藩校サミットが開催されたこともある。長岡市はサミットに対するノーハウが蓄積されている。

5. 1 3 長岡酒の陣での「川柳大会」開催

毎年10月にアオーレで開催される長岡酒の陣での「川柳大会」の開催である。事前に作品を募集し、当日、会場に掲示し審査をして大賞作品に十分杯や地酒を贈呈することを提案したい。これにより、酒の陣を今以上に盛り上げていけるのではないかと考えている。

6. 結びに代えて

3年生1人と2年生4人が一丸となり一所懸命走ってきた1年間だった。今年の活動と大きく異なる点は2つある。第1に、広報活動の場がアオーレから観光列車シュクラに変わったことである。これによって、インターネット上でよく取り上げられるようになった。シュクラでの広報活動はインターネットで簡単に見つかる。昨年まではなかったことである。第2に、リーフレットの作成である。これまでの4年間の活動で分かったことをコンパクトにまとめた。これは私たちの期待以上に効果があり、マスコミからも何度か取り上げられた。これが認知度上昇に少しばかりではあるが寄与したと活動を通して実感している。

最後に、1年間の活動を通じて得たものを簡潔に述べたい。まず、プレゼンテーション能力は多少上がったのではないかと思っている。第2回十分杯会議のためにはたくさん準備して練習した。大変だった。また、12月の地域活性化の成果発表会を控えてたくさん準備した。とても緊張した。二つの重要なイベントが終わってから多くの方からかなりお褒めの言葉をいただき、最近ではわがゼミナールにイベント参加の要請が来るようになった。不思議な感覚である。

しかし、それは形式的な成長に過ぎない。それよりも大きな収穫は、世の中の仕組みが少しばかりわかるようになったような気がする。私たちが提案したものの中でいくつかはすでに実現している。それはなぜかというと、権ゼミナールばかりがいいのではなく、それに関わる皆が良くなる場合のみであった。簡単に言うならば、「三方よし」の考え方である。これを今後の活動に生かしていきたい。

あっという間の1年間だったが、とても濃い1年間でもあった。残りの大学生活を、「満つれば欠く」、「三方よし」の考え方のもとで過ごしていきたい。

最後に、私たちを応援してくださった方々に深く御礼申し上げたい。

補論. 十分杯入門

補. 1 4つの特徴

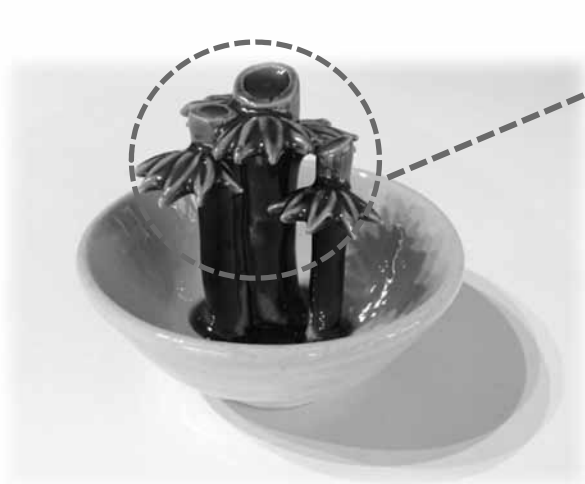
十分杯は陶器やガラスや木のマスなど様々な形のものが存在している。そして、多くの十分杯に共通していることは、①<補図1>の写真のように真ん中に柱（“飾り”と呼ばれる）が立っている、②その飾りの中を管が通っている、③<補図2>のように底に穴があいている、④一定の量（8分目程度）を超えて注ぐと、中に入っていたすべてのお酒が底の穴から漏れてしまうため杯の中は空になる、の4点が挙げられる。

十分杯はお酒を飲む際は中央にある飾りが鼻についてしまい、非常に飲みにくいいため実用性はあまりない。しかし、十分杯という杯は目でも十分に楽しむことができる杯である。十分杯の飾りは数多くの種類があるため、季節や行事によって飾るものを変えることでインテリアとしての役割も果たすことができる。人によっては、お正月に飾る家庭もあるようである。

<補図1> 江戸時代中期の平戸焼の十分杯（上図）と北越銀行の松竹梅（竹）（下図）



飾り
かぎ



この十分杯の仕組みにはサイフォンの原理というものが使われている。サイフォンの原理とは、サイフォン（ギリシャ語で、チューブ・管という意味）を使って、高いところの水を低いところへ移すしくみのことである。液体の量が少ないのであればこの原理を活用する出番は少ないが、量が多くなれば、管一本で解決できる非常に便利なものである。この原理はトイレの水道管、消火器、灯油ポンプなど私たちの身近にも使われている物がある。

<補図2>十分杯の底の穴



(注) この穴と<図1>の飾りに隠れている管がつながっている。

補. 2 教訓

補. 2. 1 『十分盃銘』の中の「天道虧盈」

十分杯には「足るを知る」という教訓がある。現状を満ち足りたものと理解し、不満を持たない、程々で満足するという意味である。しかし、十分杯の教訓として一般的に知られている「足るを知る」という言葉は、十分杯を長岡に広めたといわれる長岡藩3代藩主の牧野忠辰が詠んだ『十分盃銘（補図3）』という詩の中には出てこない。

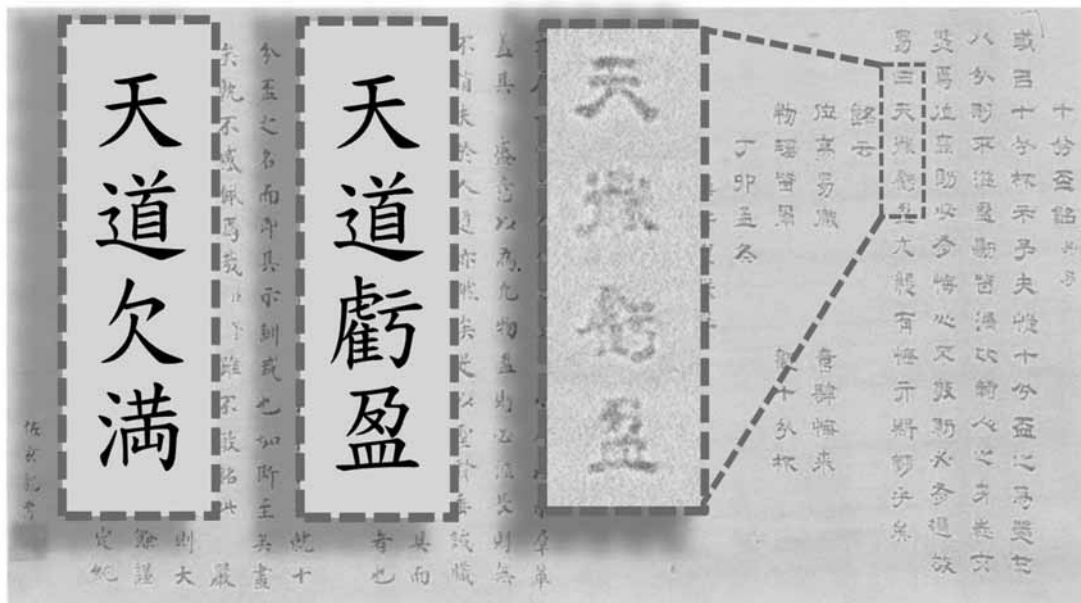
牧野忠辰は、十分杯に感銘を受けて『十分盃銘』という詩を詠んだ。その詩の中には‘足るを知る’という言葉ではなく‘満つれば欠く’という言葉が出てくる。‘満つれば欠く’とは、あまり欲張りすぎるとかえって失ってしまうので欲張るなという意味である。

江戸時代において、長岡藩はもともと、豊かな藩であり財政的にも余裕があったが、高田城の請収、幕府の委託事務、度重なる水害などが財政を圧迫し、財政的に厳しい状況になってしまった。その頃、長岡藩には十分杯が伝わったとされる。十分杯は領民が持参したとされ、その十分杯に感銘を受けた牧野忠辰は、『十分盃銘』を詠んだという。さらに牧野忠辰は、十分杯を藩士たちの生活を戒め、節約をさせるための手段として活用した。

では、具体的にどのような表現になっているのか確認してみよう。牧野忠辰の『十分盃銘』に出てくる「満つれば欠く」は正しくは「天道虧盈」の4文字である。この4文字は、

もともとは易経に出てくる言葉である。易経には「天道は盈（みつる）を虧（か）きて謙に益し」と出てくる。「天は満ちたもの（＝盈）を欠けさせ、欠けたもの（＝謙）を満ちるようにする」という意味である。このように、牧野忠辰は十分杯を見て、大きな感銘を受けたため詩を詠んだわけであるが、大きな感銘とはずばり、「天道虧盈」だと解釈することができる。

<補図3> 『十分盃銘』の中の「天道虧盈」



前述したように、飾りの中には管が通っており、約8割以上の液体を注ぐと、サイフォンの原理により底の穴から液体がこぼれてしまう。この約8割以上の液体を注ぐとこぼれてしまう様子から、「欲張りすぎるとこぼれてしまう」という意味で、「足るを知る」という教訓がつけられた。初めは、この足るを知るについて調べていたが、2014年十月の悠久祭で行った「第1回十分杯会議」の際に、権ゼミナールアドバイザーの長岡歯車資料館長の内山弘氏から、十分杯の教訓は「足るを知る」だが、長岡に十分杯を広めた長岡藩3代藩主牧野忠辰の『十分盃銘』には「足るを知る」は出てこず、「満つれば欠く」という言葉が出てくるというご指摘をいただいたため、「満つれば欠く」についても調べることにした。

補. 2. 2 様々な「足るを知る」と「満つれば欠く」と歴史

十分杯の広報活動を行うにあたり、十分杯の教訓についてより充実した説明をするために、「足るを知る」と「満つれば欠く」について調べてみると、様々なところに出てくることがわかった。

「足るを知る」という言葉が最も古く記述されたのは、おそらく中国の『老子』で、作者の老子が生まれたのは紀元前6世紀頃だと思われる。そして、その後、紀元前5世紀になってから、インドで仏教が成立した。日本の「足るを知る」は徳川光圀が寄進したとされる「知足の躑躅」が龍安寺りやうあんにあり、日本には知足院みづくにという寺があることから、おそらく

仏教から来ていると思われる。

日本では、江戸時代に徳川光圀が龍安寺に「知足の躑躅」を寄進したとされ、さらに‘満つれば欠く’と似たような意味を持つ「九分は足らず、十分はこぼれると知るべし」という言葉を残した。おそらく、徳川光圀も十分杯、あるいはそれと似たようなものを知っていたに違いないだろう。ただ、現代と違うのは、‘八分’ではなく‘九分’を使うということである。江戸時代前期には‘八分’ではなく、‘九分’という言葉が一般的だったのかもしれない。とにかく、長岡つまりは牧野忠辰に十分杯が伝わったのも江戸時代で、そこから長岡の儉約の精神が始まったことが文献上確認できた。

また、森鷗外は、大正5年に『高瀬舟』を書き、知足と安楽死をテーマとしている。

以下では、上述したものを、より詳細に調べることにしたい。

① 老子

一般的に知られている「足るを知る」は『老子』の第33章である。辞書にも出てくるのはこの「足るを知る」である。『老子』には第33章、第44章、第46章の3ヶ所に「足るを知る」が出てくる。

第33章には、「足るを知る者は富み、強(つと)めて行なう者は志有り」と出てくる。(持っているものだけで)満足することを知るのが富んでいることであり、自分をはげまして行動するものがその志すところを得るという意味である。しかし、森(1978)は、この章に出てくる、‘足るを知る者は富む」という言葉は前後の句とはあまり必然的なつながりはない。あるいは昔からあった格言であったのかもしれない’と指摘している⁴。

第44章には、「足ることを知れば辱(はずか)しめあらず、止(とど)まることを知れば殆(あや)うからず。以(もつ)て長久なる可(べ)し」と出てくる。(どの程度で)満足すべきかを知れば、屈辱を免れ、(どこで)とどまるべきかを知れば、危険に出あわないという意味である。この章で老子は名声欲の否定をしている。‘老子には生きることを尊び、長生を望ましいとする思想があるといわれる。生存ということが人間にとって本質的なものである以上、これは当然のことである。そのためには生命の自然に反する欲望を去る必要が生まれると老子は考えている’と森三樹は解説している⁵。

第46章には、「禍(わざわい)は足るを知らざるより大なるは莫く、咎(とが)は得んことを欲するより大なるは莫し」と出てくる。満足することを知らないほど大きな災いはなく、(他人の持ちものを)ほしがることほど大きな不幸はないという意味である。この章では前半に戦争のことを述べており、老子が生まれたのは春秋時代であり、当時の中国は様々な勢力があり、争いもたびたび起きていたようなので、その物欲は領土欲を特に意識しているのかもしれない。

② 仏教

仏教にもいくつかの経典に「足るを知る」が出てくる。よく知られているのは『遺教経』^{ゆいきょうぎょう}であり、ここでは『遺教経』の「足るを知る」について説明する。

⁴ 森(1978) p.138

⁵ 森(1978) p.31

遺教経には、「比丘達よ、もし諸々の苦惱から脱却せんと思ふならば、よく知足（の教え）を觀じよ。「知足」という教えは豊かで安樂、安穩なるものである。足ることを知る人は、地面で寝るような暮らしを送っていても、なお安樂である。足ることを知らない者は、豪勢豪華な家で暮らしていたとしても、まだ満足がいかない。足ることを知らない者は、裕福であっても（心が）貧しい。足ることを知る人は、貧しくとも（心が）豊かである。足ることを知らない者は、常に（モノ・音・臭い・味・肌触りに対する）五つの欲望に振り回され、足ることを知る者の憐（あわ）れまれる。これを知足と名づける。」と出てくる。遺教経は仏教の祖である釈迦の最後の説法であり、根幹には、「八大人覺」^{はちだいにんかく}⁶という悟りを得るためにたもつべき八つの条件・意識があり、「知足」はその中の一つでもある。

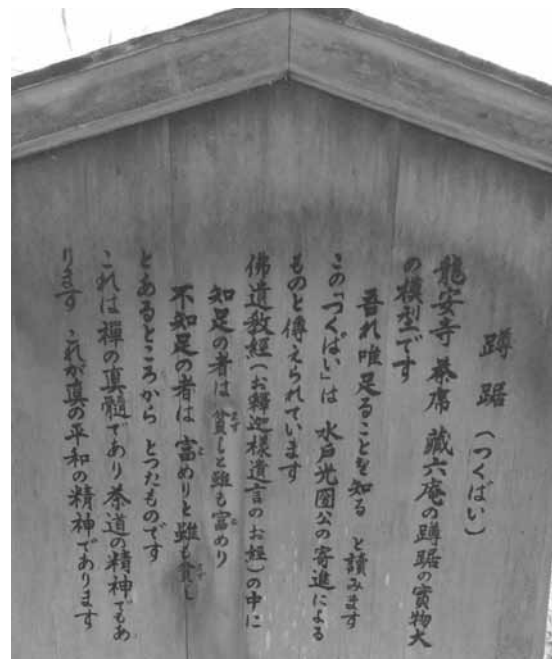
遺教経にはさらに、「欲することを少なくすること」という意味の「少欲」という言葉があり、この「少欲」は八大人覺の一つでもある。この「少欲」と「知足」を合わせた「少欲知足」という四字熟語もある。「あまり、いろいろな物を欲しがらず、現在の状態で満足すること。欲望を全て、消してしまうのではなく、欲張らないで、与えられた現実を素直に受け入れること。」という意味である。

③ 徳川光圀

<補図4>知足の蹲踞



<補図5>龍安寺の蹲踞の説明文



京都の龍安寺には徳川光圀が寄進したとされる、「知足の蹲踞（補図4）」というものがある。蹲踞とは茶室に入る前に手や口を清めるための手水を張っておく石のことである。

⁶ 少欲（欲をわずかにす）、知足（足るを知る）、樂寂靜（寂靜を樂[ねが]う）、勤精進（精進を勤める）、不忘念（念を忘れず）、修禪定（禪定を修める）、修智慧（智慧を修める）、不戲論（戲論せず）の八つ。なお、八大人覺の概念自体は、別の經典（『長阿含經』『阿那律八念經』等多数）にも見ることが出来るが、その内容は、それぞれ相違する場合がある。

丸い石の造形物の真ん中に、四角があり、その周りに、五、隹、止、矢の4文字が彫られている。おもしろいのは、この4文字に真ん中の四角、つまり‘口’という字を足すと、それぞれ吾、唯、足、知という字に代わるということである。もちろん、その意味は字のごとく‘吾唯足るを知る’という意味である。その意味合いから石庭の石が「一度に14個しか見ることができない」ことを「不満に思わず満足する心を持ちなさい」という戒めでもあるといわれる。また、徳川光圀は「九分は足らず 十分はこぼれると知るべし」という言葉を残している。九分目では足りないと思ひ、十分まで求めようとすれば、(水は)こぼれてしまうということであり、人に欲があるのは仕方がないが、際限なく求めることは危険だという意味である。

④ 森鷗外の『高瀬舟』

森鷗外の書いた小説、『高瀬舟』は、財産の多少と欲望の関係、および安楽死の是非をテーマとしている。ここでは小説のあらすじを簡潔に紹介したい。京都の罪人を遠島に送るために高瀬川を下る舟に、弟を殺した喜助という男が乗せられた。護送役の同心である羽田庄兵衛は、喜助がいかにも晴れやかな顔をしている事を不審に思い、訳を尋ねる。庄兵衛は喜助になぜそのように晴れやかな表情をしているのかを尋ねると、喜助は苦しい生活から一転、皮肉にも罪人となることで、食事をもらえるようになり、流刑先での生活費までももらえるようになり、晴れ晴れとしている。あの極貧生活に比べれば、十分すぎるほどの待遇をしてもらっていると答える。満足している様子に、船守りの庄兵衛は、「足るを知る」境地にいるような喜助に、人生というものを考えさせられる。その考えが高瀬舟の本文には、「庄兵衛はただ漠然と、人の一生というような事を思ってみた。人は身に病があると、この病がなかったらと思う。その日その日の食がないと、食ってゆかれたらと思う。万一の時に備えるたくわえがないと、少しでもたくわえがあったらと思う。たくわえがあっても、またそのたくわえがもっと多かったらと思う。かくのごとくに先から先へと考えてみれば、人はどこまで行って踏み止まることができるものやわからない。」と出てくる。

このように高瀬舟には、‘足るを知る’という言葉は出てこないが、その考え方は出てくる。文豪森鷗外が我々に残したかった大きなメッセージだったと受け取りたい。

補. 3 杯の構造と原理

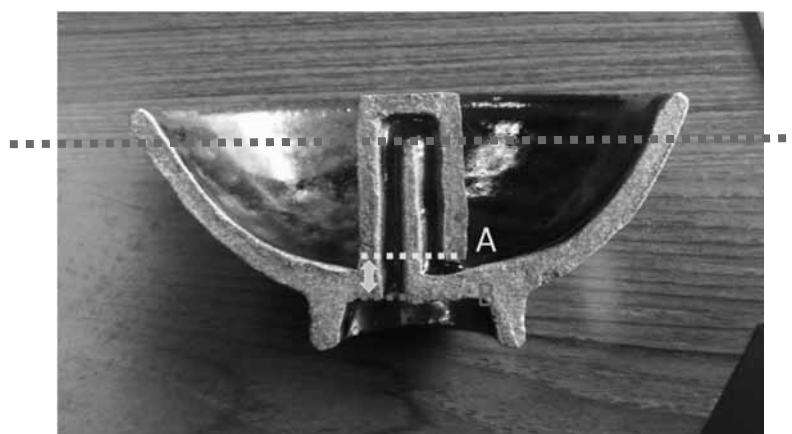
この<補図6>を見ると、飾りの内部に通っている管の曲がっている部分が、器の八分目になるように作られている。この八分目の曲がっている部分より多く液体を注ぐと、後述するサイフォンの原理が作用して、すべての液体がこぼれてしまう仕組みになっている。

そのサイフォンの原理について、簡単に述べたい。<補図6>で、管の入り口Aと出口Bの高さには少し差がある。水は“高低差”があると、低い方へ流れる性質があるので水は出口へと移動していく。私たちの実験を通して分かったことだが、水がいっぱい入ったストローを<補図6>のように逆さまにしてみた。面白い結果が出た。ストローの両断面AとBの地面からの高さが同じときは不思議なことに水はどちらからも落ちなかった。しかし、AとBのバランスが少しでも崩れると、ストローの全ての水は低い方から全部落ちるのである。つまり、十分杯の管の構造と同じなのである。

もう一つ大事なのは、なぜ、A から入った水が管の頂点まで逆流することができるかということである。水は高いところから低いところに移動するのが自然の法則であるが、これは真逆である。その理由は圧力差にある。まず、8分目まで注ぐと、管の中も8分目までは酒が入る。それ以上注ぐと、管の頂点まで酒がいっぱいになり、頂点にあった酒は下に落ちる。これによって落ちてなくなった酒の分だけ管の外の酒がAを通過して管の中に入る。その際、管の外より管の中は細いためより圧力がかかる。つまり、同じ杯の中でも管の中と外で圧力の違いが生じるのである。この圧力の違いによって酒は圧力が低いところから高いところに移動するのである。

ただ、この原理については、専門家の間でも異なる主張がある。従来の「大気圧説」の他に、「水分子の鎖説」、「圧力差説」なども提唱されている詳しくは2014年度の権ゼミナールの報告書を参照されたい。

< 補図 6 > 十分杯の断面図



(資料) 長岡在住の陶芸作家の岡崎宗男氏が製作したもの

補. 4 十分杯という名称

私たちが広報活動で質問されるのが「十分杯」という名前についてである。具体的には、「八分の杯」ではないか」という質問である。その際に私たちは決まって『十分杯銘』を取り上げ3代藩主が十分杯と命名していることを伝えてきた。しかし、3代藩主がなぜ、八分ではなく、十分としたかはわからない。ここでは、それについて推測の域を出ないが、推理してみたい。

もともと「十分」は同じ発音で「充分」という単語がある。「十分」は「10割、100%」の意味があり、「充分」は「必要なだけ」、「enough」、「not too much」の意味が込められている。つまり、「充分」は必ず100%でなくてもその人がいいと思うのであればそれでいいという意味がある。

そうすると、発音は「十分」から、意味は「充分」からとったのではないかと推論している。つまり、十分杯は教訓がある杯であるが、その教訓とは自身にとっての「充分」を理解することなのである。

補. 5 長岡と十分杯の関わり

補. 5. 1 江戸時代

最初に、〈補図7〉は、十分杯と長岡との関わりを年表にしたものである。江戸と長岡に分けたのは、江戸からの影響を見るためである。以下では、十分杯と長岡がどういった関係なのかを江戸時代と近現代に分けて説明する。まず江戸時代の十分杯と長岡の関わりについて説明する。十分杯は、江戸時代以降の長岡藩との関わりが深かったと推定される。今から約400年昔、長岡藩が開府する。長岡藩の財政は、開府当時、表高は年間7万4千石だったと言われていた。しかし、その後の新田開発や検地などにより、実際はその約2倍の14万27百石であることがわかった。開府してからしばらくの間の財政状況はかなり余裕だったと推定される（蒲原・坂本(1980)p.89）。そういった時に、高田藩で越後騒動⁷が勃発する。

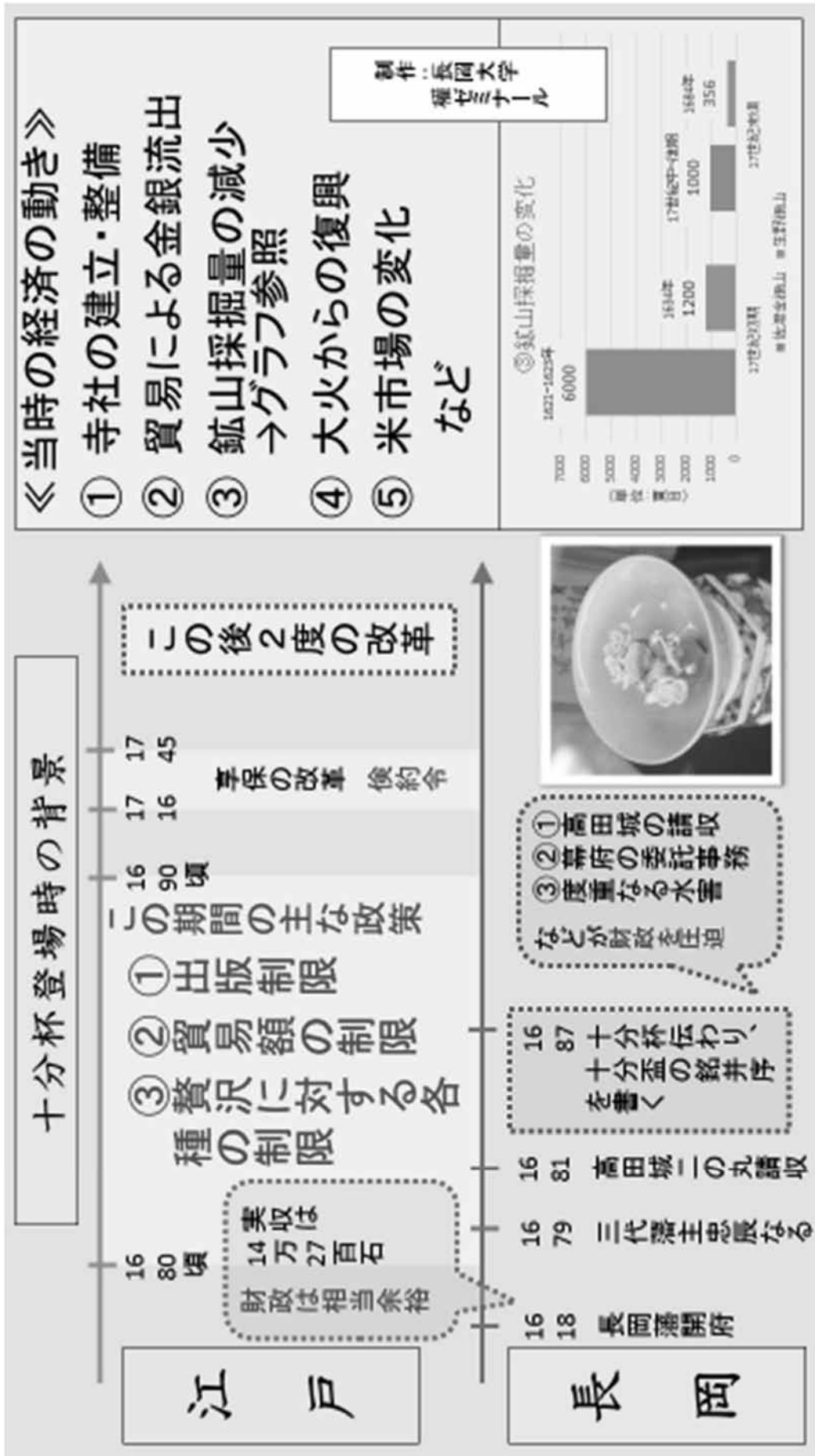
1681年、長岡藩の三代藩主牧野忠辰に高田城二ノ丸請収^{せいしゅう}、そして、それに伴う高田藩の運営の命が下る（〈補図8〉参照）。当時、江戸の長岡藩邸にいた彼は、急ぎ長岡へ戻り、高田に出兵した。この出兵は長岡藩にとって財政的には大きな負担となった。このことに加え、長岡ではこの頃、水害⁸が多かったようである。ちなみに、江戸時代を通して長岡城まで浸水する事が7回もあったと言われている。中小の氾濫を含めるとかなりの回数に及び、6万6千石強の損害になったこともあったようである（長岡市史編集委員会近世史部会(1992)p.34-35）。主に、高田藩の請収、それに伴う高田藩の管理運営、度重なる水害、以上の3つの事が原因で、開府当時は余裕だった財政も厳しくなっていた。ちょうどその頃、大阪から戻った領民が長岡に十分杯を持ち込み、忠辰が知るところとなった。忠辰は、三河⁹からの「儉約」「戒め」といった精神を持っていた。そして、十分杯には、この精神に似た「足るを知る」という精神が込められている。これが、忠辰の心に響いたのではないだろうか。忠辰は、十分杯に『銘』という形で言葉を残した。

⁷ 越後騒動・・・高田藩にて起った御家騒動。藩の政治を執っていた「小栗美作^{おぐりみまさか}」と、これに敵対する重臣とが争い、徳川五代目将軍綱吉の裁定で両派に厳しい処分が下され、高田藩は幕府に没収された。没収に際し、高田城の受け取りの役を命じられたのが牧野忠辰であった。

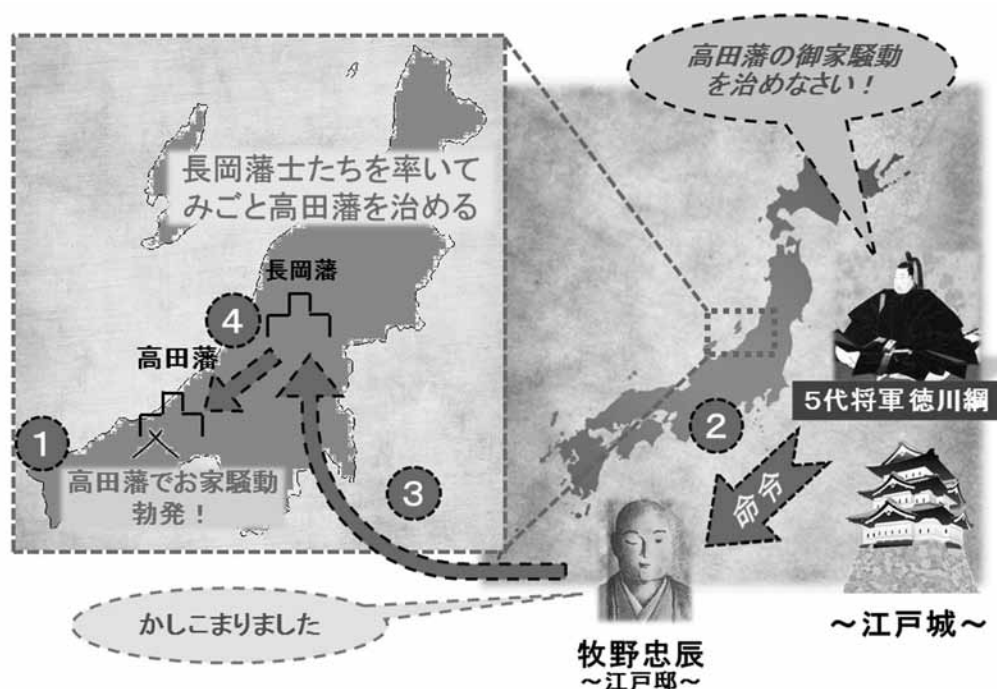
⁸ 水害・・・信濃川は暴れ川と言われており、治水技術の発達していない当時は多くの水害があった。寛文十年（1670年）から嘉永四年（1851年）までの約180年間で52回の水害が記録されている。これは単純計算で、3年半に1回の水害が起きている事になる。

⁹ 三河・・・三河国^{みかわのくに}は、現在の愛知県東部にあたる。牧野家は三河出身である。

＜補図7＞十分杯と長岡に関する年表



< 補図 8 > 越後騒動における関係図



補. 5. 2 明治時代以降

次に、近現代の十分杯と長岡の関係を説明する。時代が下って、1906年、長岡市が誕生する。そして、長岡市の初代市長に牧野家の14代目の当主、牧野忠篤が就任する。戊辰戦争に敗れ、長岡は焼け野原となっていた。如何にして長岡の復興と近代都市への発展を実現するか。この苦境に、彼は歴代の藩主たちの教を深く心に刻んで臨んだ。彼は、明治時代の日本を代表する陶芸家の宮川香山みやがわこうざんに、十分杯の作成を依頼し、この十分杯に込められた精神を座右の銘として、事に臨んだのである。そして、忠篤は十分杯を貴族に配ったようである。以降、長岡では、事の節目や、記念品として十分杯を配る事が文化の一つになった。例えば、

- ・阪之上小学校の100周年記念で配られた「鳩」の十分杯
- ・長岡高校の140周年記念で、同窓会で配られた「龍」の十分杯
- ・北越銀行の110周年記念で作られた「松竹梅の十分杯」

などがある。また、最近は結婚式、祝い事などの引出物として贈られる事もあるうえ、商品開発も進んでいる。

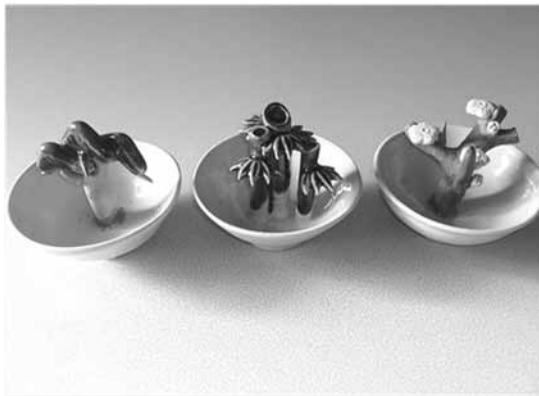
<補図 9>長岡初代市長の依頼で
宮川香山が作った十分杯



<補図 10>蒼柴神社の県社
昇格記念に製作された十分杯



<補図 11>北越銀行
110周年記念の松竹梅杯



<補図 12>阪之上小学校
100周年記念の鳩杯



<補図 13>長岡高校140周年を記念の龍杯



<補図 14>陶芸愛好家による河童杯



参考・引用文献

朝尾 直弘他（1994）『日本通史 第13巻 近世3』岩波書店

蒲原拓三、坂本辰之助（1980）『長岡藩史話』歴史図書社

国史大辞典編集委員会（1990）『国史大辞典 第11巻』吉川弘文館 p.874

塚本 学（1998）『徳川綱吉』日本歴史学会

長岡市史編集委員会近世史部会（1992）『長岡藩政資料集（4）長岡平蔵収集長岡藩資料』
長岡市

日置栄継（2010）『新・国史大年表 第五巻 - I（一六〇一～一七一五）』国書刊行会

深井雅海（2012）『日本近世の歴史3 綱吉と吉宗』吉川弘文館

森鷗外（2002）『山椒大夫・高瀬舟 他四編』岩波文庫緑 5-7

森三樹三郎（1978）『老子・荘子 人類の知的遺産5』講談社

参考 web サイト

・「江戸時代の貨幣価値と物価表 - Teio コレクション」

<http://www.teiocollection.com/kakaku.htm>（2016年1月10日閲覧）

平成27年度 学生による地域活性化プログラム
権五景ゼミナール活動報告書

【発行日】 平成28年 3月31日
【発行人】 村山 光博
【発行】 長岡大学 地域活性化プログラム推進室
〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
T E L 0258-39-1600 (代)
F A X 0258-39-9566
<http://www.nagaokauniv.ac.jp/>